
空想科学的社会意義小説 魔法同志コミュっ娘コミュン

境康隆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空想科学的社會意義小説 魔法同志コミュっ娘コミュン

【Nコード】

N3027N

【作者名】

境康隆

【あらすじ】

フランソワ・ノエル・バブーフは貧農の娘。愛称はノエル。中学三年生。悩み事は高校受験。強く明るい娘。

魔法皇帝が統治する冬の帝国で、母と二人で暮らしていた。

そんなノエルはある日、瀕死の虎の魔獣 ポチヨムくんと出会った。

ポチヨムとの出会いを機に、ノエルは帝国と己を翻弄する運命に呑み込まれていった。

一、フランソワ・ノエル・バブーフ

マルクス！ エンゲルス！ コミンテルン！ 世界同時に革命よ！

魔法同志！ コミュニッ娘コミュニン！ そうよ私は護民官！
グラキユース
君のハートに！ チェ・ゲバラ！

一、フランソワ・ノエル・バブーフ

「貧農！」

少女はそう叫ばれると、石を投げられた。こめかみに鈍痛が走る。
痛い

痛い。だが少女は声に出しては叫ばない。

彼らは 石を投げてきた少年達は、反抗的な態度を嫌う。いや
反抗的な態度を誘っている。こちらが齒向かうような態度を見せれば、更に攻撃的に出てくるだろう。幸い石はかすめただけだった。
我慢できる。

何よ、これぐらい

と、少女は口の中で小さく呪文を唱えると、痛みを和らげる魔法を使った。

「やーい、貧農！ 貧農！ 悔しかったらかかってきな！」

はやし立てる少年達は、皆、十をやつと過ぎたぐらいだ。少女より明らかに年下の少年達は、次々に石を投げてくる。

地方都市の舗装など、望むべくもないこの時代。投げるのに適した石は、文字通りそこら中に転がっていた。

少女は石をぶつけられようと、彼らを見無視して街をゆく。

少女がゆくのは、首都への街道を兼ねた、街の中央通り。高くて
も五階程までしかない、コンクリートやレンガ作りの街並が両脇に
続いていた。

鉄道の路線からは外れてしまっているが、昔から首都へと向かう者が最後に立ち寄る場所として栄えた街だ。

石畳だが広い中央通りは、多くの行商の屋台でにぎわっている。多くの者が徒歩か馬車だ。路面電車のような文明の利器は、首都のような主要都市にしかない。大人も子供も、皆が徒歩と馬車でこの街をいき交いしていた。

そして幾人かはそのまま馬車で街を通り過ぎ、首都へと向かう。運がよければ自動車で移動する者が見られ、もっと運がよければ魔法で空を飛ぶ者にも出会えるだろう。

そんな科学と魔法がともに発達した時代の地方都市を、少女は紙袋を持って歩く。

少女は買い物帰りだ。塩を買ったの帰り道。

塩は一滴みも無駄できない。下手に相手をして、こぼしてしまつては大変だ。

幸い近づくことを恐れた投石で、そうは当たるものでもない。

こめかみに当たった一つぶては、そこそこ痛かったが、まぐれ当たりだと思つて、少女はぐつと我慢する。

「ひ・ん・の・う！ ひ・ん・の・う！」

少年達は石が効果的でないと見ると、一層言葉に力を入れた。

この町は首都に近いお陰で、商業が発達している。その為戦争や反乱騒ぎで疲弊した他の地域に比べれば、まだ裕福だ。

そして少年達はブルジョワ 正確にはその親達が裕福 で、貧しい人間が自分達の豊かな町にやってくるのが許せなかった。

貧乏がうつる。貧農の子供がやってくる度にそう言い合つた。そして自分達よりひ弱そうな貧農の子供がくると、はやし立てて、追い立てた。

「……」

少女は気に留めないことにした。所詮子供の悪戯だ。そんなことより今は塩が大事だ。

「貧農！ こら！ こつち向け！ 無視すんな！」

完全に無視された少年達はムキになる。別の貧農の子供になら、ここまでムキにはならなかっただろう。

少年達は自分達が何故、ここまでこの少女にムキになるのか、『こつち向け』と思ってしまうのか、『無視すんな』と望んでしまうのか、自分達でも分からなかった。

少年達から見れば、今まさに横顔を見せて通り過ぎようとする少女は、随分とお姉さんに見えてしまう。

歳の頃は十四、五歳。その少女はツンとしまして、端正な顔を前に向けたまま、少年達の前を通り過ぎてしまう。

「この……」

このままでは去りゆく少女に、完全に無視されてしまう。相手にされない。

少年達は焦った。

少女は明らかにみすばらしい格好をしている。つぎはぎだらけの農作業服だ。自分達の家の使用人でさえ、あそこまで『つぎ』をあててしまえば新しい服を買うだろう。

ただのみすばらしい農家の娘。少しからかってやって、身の程を思い知らせて、自分達の鬱憤のはけ口にする。それだけの貧しく汚い貧農の少女……

だが

その首都サントペテルブルクに降り積もる雪にも似た、白く柔らかな頬を、自分達の為に赤らめて欲しい。

その偉大なるコーカサス山脈の山々のような、気高くツンと尖った鼻を、自分達の冗談でくすぐすと笑って揺らして欲しい。

その最北の不凍港ムルマンスクで見つけたような、可愛いらしい貝殻のような耳で、自分達の自慢話を聞いて欲しい。

そう、だが少年たちは我知らず、少女を母なる祖国にたとえてしまふ。

それほど少女の美貌は、少年達の心を奥深くで捉えて離さなかった。

少年達の心からの驚嘆と羨望による賞賛はまだ続く。

そう

その極北の地で見られると聞く、オーロラのようにスツと引かれた眉が、自分達に出会えたことを喜んで、ぴよんと一つ跳ね上がるのを見せて欲しい。

その母なるヴォルガ川のように、淀みなく流れる黒く長く艶やかな髪を、自分達の目の前で揺らして欲しい。

そのシベリアの凍てつく空気もかくやと煌めく、触れば切れそうにも見える切れ長の目を、正面から見つめてみたい。いや、見つめられたい。

そして何より、その聖教会でお祈りする時に見上げる、イコンの生神女様　聖母様のような、可憐な唇で自分達の名を、いや自分の名前を呼んで欲しい

「……」

少女は平静を装っているのか、少年達の前を平然と通り過ぎる。

少年達の羨望の眼差しを受けて去っていく。

少年達にとってその可憐な少女は、退屈で窮屈で鬱屈な日常に舞い降りた、一人の天使だった。

だから少年の一人が、その少女の唯一の欠点を口にして、気を惹こうとしたのも、やむを得ないことだったのかもしれない。

「こ、この……　ひ、ひ、ひ、貧　」

少年は十をやっと満たす短い人生の中で、その生涯最大の賭けに出た。

「ひ、ひ、ひ、貧　貧乳！」

「　ッ！」

少女はキツと振り返る。

少年達は一瞬喜びに顔をほころばせた。聖母様とまで見間違った可憐な少女が、振り返ってくれたのだ。少年達は賭けに勝ったのだと一気に紅潮し、そして　一瞬で青ざめた。

「何ですって！」

少女は怒りとともに、身を翻す。頬を紅潮させ、鼻息を荒くし、耳を引きつかせ、眉を吊り上げ、髪を振り乱し、目を血走らせる。冬眠に失敗した熊もかくやという形相だ。

怒りに血走ったその姿は、聖母様どころか鬼子母神だ。

「ギャーッ！ 逃げろ！」

「こら、逃げんな！ 待ちなさい！」

少女は脱兎のごとく逃げ出した少年達を追いかけ出す。聖母のものと見紛わんばかりに可憐な唇は、食いちぎらんばかりに歯をむき出しにしていた。少女は大事な塩の入った袋すら、思わず放り出す。

「待て！ 待ちなさいってば！」

「殺される！」

少年達の淡い恋が今 終わった。

一、フランソワ・ノエル・バブーフ2

「塩……」

その大きな獣は、死にかけていた。飲まず食わずが何日続いただろう。水だけしか口にしていない。いや正確には雪だ。母なる大地に降り注ぐ恵みの雪。農家には恨めしいだろうが、この雪だけが、その獣の命を繋いでいた。

「恵みの塩か……」

獣は目の前に落ちている塩の入った袋を見つめる。顔を近づけてその目で見ないと、塩かどうかすら分からない。獣特有の自慢の鼻は、衰弱のあまり全く利かなくなっていた。

だが確かに塩だ。海に投げ出された時は、その塩辛さが恨めしかった塩だ。塩水はいくら飲んでも、喉を潤すことはない。むしろ焼けるような喉の痛みを呼び起こす。

塩を見て、この獣はあの時の喉の痛みを思い出した。

そして何より大量の塩水を飲んで、海に沈んでいった反乱の同志達を思い出された。

ありがたい。そう素直に思いながら、獣は一口塩を舐めた。塩は命に不可欠な物だ。だが彼のように飲まず食わずの状態では、どうしても不足する。しょっぱい味が舌とその身に染みた。

彼の反乱は失敗に終わった。船上での反乱。

攻撃を受け、仲間らは皆海に投げ出された。

多くの者が海に吞まれ、生き残った仲間ともはぐれた。獣の身でありながら、軍属であり、貴族の称号すら得ていた彼も、今や追っ手に追われる身だ。

塩を舐め獣はやっと一息吐いた。

皆近寄ってこぬかと、獣は辺りを見回す。

久しぶりの塩分だ。生き返った気がした。周りを見る余裕が生まれた。首都郊外にある小さな街。申し開きの為に首都に向かっ

たが、その手前の街で力尽きようとしている。

町中に入るのは危険だと思っていた。だがどうせ死ぬのなら、にぎやかなところで死にたい。そうも思っていた。多くの人々に囲まれた、幸せな時代を懐かしんでの望みだった。

だが今は誰も近寄ってこない。遠巻きに様子を窺っている。

死にかけの、傷だらけの、薄汚れたアムールタイガー

体長四メートルにもなるうかという、その巨体には、誰も近寄ってくるはずはなかった。

「分かった…… 去ろう……」

誰に聞かせるでもなく、獣は小さく呟く。

貴族に列せられていた時は、子供達が我先にと駆け寄ってきた。まさに飛びついてきた。他の貴族達は敬意を持って接してくれた。子供達は競い合うように、彼の背中によじ登った。

幸せな思い出だ。

獣は町を去る為に、体を翻そうとした。ガクつと上体が傾く。左前足に力が入らなかったのだ。情けないことに体勢を整えることができず、顎から冷たい大地に落ちてしまった。

「クソッ……」

獣は悪態について体を起こす。目がかすむ。

もうダメかと、獣は覚悟を決める。だが、ここではと獣は最後の力を振り絞る。

町の住民は怯えている。ここでは死にたくない。弱気になって人恋しくなったが、どうも彼らは歓迎しては いないらしい。

獣は己に残された力を絞り上げるように顔を上げた。ぼんやりと少女が走ってくるのが目に映る。いつか見た光景だ。獣が姿を現すと駆け寄ってきた子供達。

ついに幻覚が見えるようになったらしい。

「幸せな思い出の中で死ねるとは……」

獣がまさに、これが最後と目をつむろうとしたその時
幻覚の中の少女は駆け寄ってくると、飛びついて

一、フランソワ・ノエル・バブーフ3

「何さらすのよ！ このケダモノ！」

少女は走ってきた勢いそのままに飛び上がると、自分の何倍もあるようなアムールタイガーの顔に、両足の裏を食らわせた。

「ガハッ！」

獣は一気に目が覚めた。寒さと空腹のあまり、眠りかけていた。この極寒の国『冬の帝国』で、街角といえども眠ってしまつては命がない。

實際死の覚悟をした。

だが今の一撃で、あっという間に気合いが入った。目が覚めた。「何をする！」

獣は自分の顔にめり込んだ、少女の足の裏を振り払って叫ぶ。自分でも、先程まで死を覚悟していたとは思えない程の、大きな声だった。

少女は軽やかに着地する。足を振り払われたとは思えない、鮮やかな身のこなしだった。

少女は衝撃を膝を折って吸収すると、何事もなかったかのようにすつと背筋を伸ばす。

その少女の後方には、頭に無数のたんこぶを作った少年達が、山のように折り重なっていた。

少女はそのまま自分が不注意で落とした塩を舐めていた、巨大な獣を見上げて口を開く。

「あら？ 人語が理解できるのね。まさか……」

「いかにも。ワシは魔法のマスコット猛獣 戦漢ポチヨム……」

獣はそこで言い淀んだ。こんな町中で、本名を大声で名乗り上げようとしている。国に追われる身としては、正気の沙汰とは我ながら思えない。何か調子がおかしい。

「？ 何よ？ ポチヨム 何？」

少女は言い淀んだ獣に、その先を促した。周りに市民が群がる。誰も近づいてこない。

彼らが近づいてこないのは、先程までならその獣の放つ『忌み』の雰囲気によるものだろう。関わってはいけないという暗黙の了解だ。

今は違う。それは王者に対する『畏怖』に変わっている。近寄りたがたい王者の気だ。獣の放つ威圧感ほそれだけ圧倒的だった。

だが少女は臆するところがないようだ。自分を見下ろす獣を、怯まず見上げている。睨み返している。正義は我にある。その堂々とした顔は、まるでそうとも言いたげだ。

「ワシは…… ポ…… ポチヨ…… ポチヨ…… ポチヨムくん……」

獣は思わずウソをつく。だがそれほど本名とは、かけ離れていない。言った端から、しまったと獣は思ってしまう。

「ポチヨムくん？ ガタイの割に可愛い名前ね」

「そ、そうか？」

ポチヨムと名乗った獣は困惑する。

軍属でもなくなり、ましてや貴族でもなくなった自分はただの獣だ。怖がられて当たり前だ。それなのに目の前の少女は、全く臆するところがない。

「私はノエル。フランソワ・ノエル・バブーフ。ノエルって呼んで名前の可愛さなら負けないわ」

ノエルと名乗った少女は自分の名前が自慢なのか、自信満々に鼻を鳴らす。

「フランソワーズ……」

「フランソワ！ フランソワ・ノエル・バブーフ！ ノエルよ！」

しかし、フランソワは異国の名前で、確か男性につけるものでは？」

「いいの！ 私は気に入っているの！」

「そ、そうか。分かった、ノエル殿か」

「殿つて何よ？ かたつ 苦しいわね」

「そ、そうか？ そうだな……」

かと言って元貴族にして元軍属のポチヨムには、柔らかい話し方などできない。とりあえず頷いた。どうもこの少女は人の いや 獣の調子を狂わす。

「それより…… それどうしてくれるのよ」

ノエルは地面に落ちた、塩の袋を指差した。

「ん？ あの塩は、お主のだったのか？」

「そうよ」

「それは申し訳ない」

「申し訳ないで済むの？ 破れてるじゃない」

「えっ、それは最初からでは？ 落ちた拍子に破けたのではないですのかな……」

「お黙り！ 言い訳なんて男らしくない！ あなたに責任がないって言うの？」

ノエルはズイっと前に出た。

取り巻いた市民がどよめく。ちよつと獣が顔を前に出せば、食われてしまうような距離だ。実際この虎の口は、少女の腰から上など一呑みに見えた。

「グッ…… 確かにワシも一口、いただきはしましたが……」

「でしょ！ 弁償してもらうからね！ ポチヨムくん！」

「べ、弁償ですか？」

「ふふん、そうよ。高くつくわよ……」

ノエルはポチヨムを見上げながら、不敵な それでいて屈託のない笑顔を向けた。

一、フランソワ・ノエル・バブーフ4

時はユリウス歴一九@\$年。

国はその名を聞けば、誰もが思わず身震いするという『冬の帝国』。

その名の通り、冬が長く続くこの国では、人々の暮らしは貧しかった。多くの者が、今日の暮らしの糧を求め、明日の希望のあてを探していた。

長年続いた魔法皇帝　マジカル・ツァーリを頂点とした帝政政治は、多くの分野でそのシステムが悲鳴を上げていた。一度特権を得た者はその既得権益を手放そうとせず、己を守る為にその力を使った。そして貧しい者はその貧困故に、僅かな蓄えも残すことができない。

その結果一部の者は富み続け、多くの者は飢え続けた。

だがそれももう、限界に近い。一部の夢想家の絵空ごとと考えられてきた『社会意義』革命。『空想科学的社会意義』を唱える過激派　革命論者が、日に日に力を増していた。

彼らは言う。『絵空ごとで結構。空想科学的と思われる程の社会意義こそが、暮らしの糧であり、希望のあてなのだ』と。

国の方々に、暴動や反乱の噂を耳にする日々が続いた。多くが自然発生したものだが、その内幾つかは彼らに率いられたものだった。混乱の続く冬の帝国。今その国で一人の少女の運命が、大きく動き出そうとしていた。

フランソワ・ノエル・バブーフはノエルと呼ばれている。

魔法の力が人々の生活を左右する世界で、貧農の娘として生まれた。

父は幼い頃に亡くした。今は母と二人で暮らしている。暮らし向

きはよくない。借り物の畑に幾ばくかの種を蒔くが、母娘がやつと食べていけるだけの実りしかない。

「ノエル…… 願書はもらってきたの？」

ノエルの母　マリーは、もう何度も訊いた質問を繰り返した。今日娘に町まで塩を買いにいかせた。ついでに高校入学の願書をもらってくるように、言いつけておいたのだ。

九月の入試まで後一年を切ったというのに、娘はまるで関心を示さない。そして吹雪の中を家に帰ってきた娘は、むしろ母の目当てである願書らしき物を持っている気配がまるでない。

「何言ってるのよ？　お母さん。高校なんていいって」

娘は　ノエルは、何度も返事をした内容で答える。

高校は自分には過ぎた望みだ。ノエルはそう思っている。自分が中学に通っていた分、農作業を手伝う時間が削られた。それすら心苦しいと思っていた。

貧農の子は皆事情は同じで、多くの者が小学校までしか通っていない。この近所の貧農の子供で、中学校に通っていたのはノエルだけだ。

中学だつて贅沢だったのだ。ノエルはそう思う。

ノエルは家に帰ってくるなり、願書の話をし出した母の、心遣いに内心感謝する。だがやはり、高校にはいかないでおこうとも思っている。

「いつも言ってるじゃない。それより、ひどい吹雪だったわ」

ノエルは自分の肩に降り積もった雪を払った。

町から帰る頃には、外はひどい吹雪になっていた。

「ダメよノエル。少しでも上の学校にいかないと……　いつまで経ってもこんな暮らしよ」

凍えた優しい娘の為に、マリーは台所でシチューを温め出した。具など僅かばかりしか入っていない。ただ温まる為だけの夕食だ。「でもお母さん。どうやって学費を払うのよ？　私が学校にいくつてことは、それだけ働き手がいなくなるってことなのに……」

今日のご飯にも事欠くような、こんな暮らしは確かに抜け出した。だがこんな暮らしだからこそ、高校にいくような余裕はないのだ。

母が時折、空のお碗をかき込んで、娘の前ではご飯を食べた振りをすることがあるのを、ノエルはちゃんと知っている。

ノエルは母がシチューの為に背中を見せた隙に、買ってきた塩を小さなビンに移し替えた。しおらしいことを言いつつ、この隙を狙っていた。破く、こぼす、舐められる　の、己の散々な失態を知られないように、ノエルは素早く塩を移し替える。

「それは……」

「いいの。分かってる。うちにそんな余裕はない」

「ノエル……」

「いいのよ。中学に通わせてもらっただけで、私は幸せ」

「……」

「でね、聞いて。いいもん拾っちゃった」

ノエルは嬉しそうに微笑む。隠し事をしているのを暗に示すかのように、両手を後ろに隠した。そのまま上半身を前に屈めて、母の様子を上目遣いに窺う。

「何？　ノエル……」

「へへん」

「お前がそういう顔をする時は、ろくなことがないのよね」

「何言ってるのよ、お母さん！　今日のは凄いんだから！　おいで！」

ノエルの合図とともにドアを開け、玄関から姿を現したのは、巨大なアムールタイガーだ。

「きゃっ！　何？　ノエル！　と、虎？」

「そう、虎よ！　お母さん！　凄いでしょ？」

そう、小さなドアから身を乗り出したのは、人を一呑みにせんばかりの巨軀を誇る虎だ。

「ノエル殿　」

その野獣は凜々しくも人語で呼び掛けると、我が身に降り積もった雪を振り落とす。

「こ、この天候で……　そ、外で……　待機というのは……」

そしてそうとだけ言いつと、死相を浮かべた顔で前のめりに家に倒れ込んだ。

一、フランソワ・ノエル・バブーフ5

「なっさけないわね！」

ノエルはポチヨムの額をペチンと叩いた。

部屋の中で寝そべっているポチヨムの眼前に、ノエルは膝を合わせ、ペタンとお尻を着いて座っていた。両足のかかとは、かなり外側に開いている。ノエルは体が柔らかいようだ。

顔だけで一抱えある　そんな巨大な顔の持ち主を、ノエルとマリーは家の中に引っぱり込んだ。

ポチヨムは自分でも動こうとしたが、意識がもうろつとして思うように体が動かなかった。

だが意外なことに、二人だけでポチヨムの体を運んでしまう。もちろん腕力でしたことではない。二人の魔力がポチヨムを運んだのだ。

ポチヨムは二人の魔力に、失いかけた意識の中で感心した。

「野生動物でしょ？　シベリアの虎でしょ？　ネコ科最大でしょ？　体毛長いんですよ？」

ノエルは『？』の数だけ、ポチヨムの頭を平手で叩いた。その額の感触が気に入ったようだ。

「詳しいですな」

ポチヨムはまた素直に感心する。部屋のぬくもりで、息を吹き返してきた。危うく家の灯りを前にして、また凍死しかけた。

夢中になると、ノエルは周りが見えなくなるようだ。だが、基本的には賢い娘らしい。そして叩かれても不思議と腹が立たない。

「ノエルは勉強ができるの」

マリーが嬉しそうに笑う。暖めていたシチューを、ポチヨムの為に更に熱している。焦げないようにと、マリーは丹念に鍋をかき混ぜた。

「それにそれ以前に、魔法のマスコット猛獣　魔獣でしょ？」

ノエルはポチヨムのヒゲを引っぱった。引っぱりやすそうに伸びていたから、引っぱってみた。そんな感じの無造作な動きだった。相手の痛みとか、都合とか、自尊心とか、そんなことは気にしない。そう気がつかないし、気にならない。そんな引っぱり方だった。「それを言われると面目ない」

頬の毛皮がピンと引っぱられるのを肌で感じつつ、ポチヨムはされるがままに身を任せた。少々痛いけど、やはり腹は立たない。ノエルは不思議な娘だと、ポチヨムは思った。

「お腹空いてちゃ、誰だって力が入らないわよ」

マリーが湯気とともに立ちこめる鍋の香りを満足げに嗅いだ。元より広い家ではない。玄関を開けたらすぐに台所だ。ポチヨムはドアのすぐ横で、そして台所のすぐ前で床に伏せている。ポチヨム一人で、この部屋はいっぱいになっていた。

食事もこの部屋でとる。テーブルは立てかけて、脇にどけた。

「ふわふわの　もとい！　ごわごわの毛皮！」

ヒゲを引っ張るのにも飽きたのか、ノエルが嬉しそうにポチヨムの毛皮に顔を埋めた。

「ムツハーツ！　獣臭ッ！」

そしてノエルは顔をしかめながらも、嬉しそうに面を上げる。

「これ！」

「がはは。構わんですよ」

「そうよ！　だって本当なら、獣臭どころか、死臭を漂わせてるところだったんだから！」

「これ！　ノエル！」

「がはは。そうですな」

「恩返しに、バンバン働いてもらうからな。ポチヨムくん！」

「これっ！　ノエル！　もうすいませんね、ポチヨムさん。ほら、召し上がって下さい」

マリーが振り返り、寝そべるポチヨムの前にシチューを鍋ごと置いた。

「いや……しかし……」

「遠慮しないでいいぞ！　ただし、ただ飯は、今日だけだからな！　ポチヨムくん！」

「これ！　ノエル！」

「ウヘッ！　あれ、お母さん私のは？　ポチヨムくん鍋ごと渡し
たら、私の分がないよ」

「大事な塩を放り出して、ブルジョワの子供追いかけるような娘は、
干し芋で十分です」

塩は結局あの後、少しずつこぼしながら家に持って帰ってきた。
せっかく内緒で塩をビンに移し替えたのに、ポチヨムとの出会い
を大げさに話し出したノエル。この娘は母に自分の失敗が知られて
しまうことに、全く気がつかなかった。

「ええー！　ポチヨムくんだって舐めてたもん！　私のせいだけじ
やないもん！」

「干し芋も、贅沢だったかしら？」

「あはは、お母さん。作り笑いこわーい。干し芋サイコー……」

「いや。ノエル殿も、マリー殿も、ワシの為に……」

「いいのよ。ポチヨムさん。今一番栄養が必要なのは、あなたよ」
自身はライ麦のパンを手にとってマリーが笑う。作り笑いとは正
反対の優しい笑みだ。

「そうだポチヨムくん、遠慮するな！　一口舐めて『もうお腹いっ
ぱい』って言えばいいんだ！」

「ノエル！」

「ウヒヤッ！　干し芋、ウツマーツ！　最高！　絶品！」

「……かたじけない……」

ポチヨムは込み上げてくるものをこまかそうとしてか、慌ててシ
チューに首を突っ込んだ。

「でも、お母さん。アムールタイガーってさ　」

「何？　ノエル」

「猫舌じゃないのかな？」

「あっ？」

「アツッ！」

ポチヨムが舌を腫らしながら、シチューから顔を上げた。

「……」

「……」

「……」

結局冷めるのを待つ気まずい時間に耐えられず、シチューは三人で分けて食べた。

一、フランソワ・ノエル・バブーフ6

冬の帝国は手詰まりになっていた。

この帝国は北半球の大陸北部にあり、南部の良好な港に恵まれていない。

海の多くが北極圏に属し、使いでのいい不凍港がなかった。他の国が港から植民地を目指す時代に取り残され、ならばと陸地をひたすら東に進み、国土を拡げた。

だがその広い国土が仇となる。大き過ぎたのだ。国境線は伸び、国内の異民族は増えた。その結果、どちらも自国の支配下に置く為に、身の丈以上の軍事力が必要となった。

東への国土拡張を進めた結果衝突した『日の帝国』。

東方の小国と侮っていた、その日の帝国との戦いにも破れた。帝国は一気に疲弊した。

この弱体化を好機ととらえ、国内に潜伏した社会意義者達が活動を活発化していった。

歴代の魔法皇帝も、手をこまねいていた訳ではない。農奴を解放し、鉄道を敷き詰め、地方議会を認め、富国化を急いだ。

だがむしろタガが弛んだ時にこそ、人々の不満は表に出やすい。各地でデモや反乱騒ぎを聞く日々が続いた。

そして時代は、冬の帝国に更なる消耗を強いた。

『鉄の帝国』とその同盟国『音の帝国』との戦争だ。後に『第一次魔界大戦』と呼ばれるこの戦いは、世界初の総力戦だったと言われている。戦争に、国の全てを費やす戦いだった。

冬の帝国は確実に、消耗していった。

「あははははっ！ 風花^{ふうか}！ おっはよ！」

ノエルは学校に登校するや、廊下で見つけた友人の背中に飛びつ

いた。

「ビックリするって！ ノエル！」

ノエルの襲撃に驚いて、背の高い巻き毛の少女が自分の肩を振り返る。ノエルの友達で貧しい鉄工所の娘 工藤・リヤ・風花だ。友達からは風花と呼ばれている。

「聞いてよ、風花！」

「何だよ？ 聞くから離せよ！」

風花は朝の学校の廊下で突然背中に飛びついた友達を、振り回しながら応える。

「えへへ、聞いて驚きなさい、風花！ 実は猫を ん？」

「どうした？」

「リッキーの奴、またいじめられてる」

ノエルは風花の背中から降りた。その視線の先に、同級生に頭を小突かれている気弱そうな少年がいた。分厚い本を抱え、己の身よりはその本を守って叩かれるがままになっている。

「リッキー？ 郷リッキーか？」

「うん。ちよつと助けてくる」

「おい、ノエル！ ちよつと！ たく…… 相変わらずだな」

ノエルが正義感に肩を怒らせて、人だかりができて始めていたいじめの現場に突入していった。

その友人を、風花は慌てて追いかけた。

ノエルはその容姿から人目を引く。いじめの現場に乗り込んでいつては尚更目立つ。歩くだけで集めた視線を、ノエルは騒動の現場までまとめて引っ張っていった。

「止めなさい！」

凜とした声でノエルは、いじめの前に仁王立ちする。追いついた風花を初め、取り巻いた生徒の視線がノエルに一斉に集まった。

「またお前か、フランソワーズ！」

一際強くリッキーを小突いていた男子が、苛立たしげに片目を細めてノエルに振り向く。

「フランソワよ。いいからリッキーを離しなさい！ よってたかつて、恥ずかしいの？」

「ああん？ こいつ本ばっか読んでっからな、体使った遊びを教えてやってただけだって！ 邪魔すんな！」

そう言つてその男子は、見せつけるようにリッキーのお尻を蹴り上げた。

「ッ！」

「なっ！ 止めな」

リッキーが声に鳴らない悲鳴を上げ、ノエルが怒りに任せて一歩前に出ようとしたその時、

「お止めなさい！」

そのノエル以上に凜とした声が、廊下中に響き渡った。

一、フランソワ・ノエル・バブーフ

大きく可憐な瞳を輝かせ、一人の少女が人垣をかき分けて現れた。豪奢な金髪をたたえたその少女は、ノエルから周囲の注目を根こそぎ奪い取る。

凜とした声音によく似合う、これまた凜とした立ち姿の少女だ。簡素だが上品な生地 of 服を身にまとい、一目でブルジョワ階級の娘だと分かる。

よく櫛が通っていると思いきまぶしいぐらいの金髪が、ふんわりと膨らむように肩から腰にかけて流れていた。そして何より自信に満ち溢れた、輝くような笑みを浮かべている。

肌は白い。肌理が細かい。そして言うなれば、生活に汚れていない。

意思の強さを表すかのように固く結ばれた唇は、吸い込まれそうな赤を皆に見せつける。

「ブルジョワ……」

ノエルはその姿に思わず呟く。何かとやり合っている、隣のクラス of 生徒だったからだ。

「てめえは…… アナスタシア……」

「あら、アニーって呼んでよ。クラスメートでしょ」

苦々しげに呟く男子生徒に、アニーと名乗った女子生徒は澄まして応える。

「うるせえ！ ブルジョワ階級が、俺らの学校でデカイ顔すんな！」

「上品な服着やがって！ 嫌みなんだよ！ のさレたいか？ ああん！」

「そうよ！ デカイ顔しないでよ！ 引ッ込んでなさいよ！」

「ノエル！ お前までいじめの仲間みたいだぞ！」

風花はハラハラしながら、ノエルとアニーを交互に見る。

「ノエル？ あら、ノエルじゃない？ いたの？」

「いたわよ！　むしろ先約よ！　てか、今気づいたのね！　腹立つわ、あんたはいつもいつも！」

「あらそう。でもそのいじめてる男子は、私のクラスの生徒なの。邪魔しないでくれる？」

「いじめられてる男の子は、私のクラスの生徒よ。ブルジョワさんこそ、引っ込んでなさいよ」

「私はブルジョワさんじゃないわ。アニーよ」

「あらそうだった？　心証が薄いから、いちいち覚えてられないわ。ご免あそばせ。おほほ」

「ええそうよ。言われる度に、そう言っているわ。記憶力のない娘ね、ノエルは。うふふ」

ノエルとアニーは、周囲の目を釘づけにしながら笑みを向け合う。いじめの相手すら忘れてしまったかのように、不敵にわざとらしい合わせ鏡のような笑みだ。

「おいおいどうでもいいけどよ！　俺らの相手は、どっちがしてくれんだ？　ああん！」

「そうだ。呼びかけておいて、ガン無視とはいいい度胸じゃん」

リッキーを放り出すように突き飛ばすと、一際体格のいい男子が二人、ノエルとアニーの前に進み出てきた。苛立たしげに目を細め、自分達の楽しみを邪魔した女子二人を睨みつける。

「調子に乗んなよ！　ブルジョワ！」

そう叫んで掴みかかってくる一方の男子を、アニーは力ではなく技で迎え撃つ。

軽やかに身を翻して横に避けると、同時に相手の手首を掴んでいた。相手の手首の親指のつけ根辺りに、自分の親指を当てると、アニーはそのまま何げない風に捻り上げた。

「アニーよ。何度も言わせないで」

「イテテテッ！」

痛点を極められたその男子は、痛みから逃れようと身を振る。

だがそれはアニーの思惑通りだった。気がつけば男子は、腕を取

られたままアニーに背中から回られている。もう一度アニーが軽く力を入れると、男子は肘を曲げられ後ろ手に手を取られていった。

「やるじゃない……」

その鮮やかな手並みにノエルが思わず呟くと、その声が聞こえたのか、

「ふふん」

アニーが自慢げに鼻を鳴らした。

「余所見してんじゃねえよ！ フランソワズちゃんよ！」

「フランソワよ！」

殴りかかってきたもう一方の男子を、ノエルは魔力で迎え撃つ。

ノエルが左手を軽く振り上げた。左手は魔術を使う上での利き腕だ。

実に軽やかにふるわれたその左手の魔力で、その男子は力強く足を払われた。

「ッ！」

男子は声も出せずに空中で半回転する。見えたのは天井だ。

ノエルが挙げていた左手を振り下ろした。男子は今度は上から魔力で叩きつけられた。

床に背中から激突する

誰もがそう思った瞬間、ノエルは更に左手をふるう。

「ひ……」

男子は床に叩きつけられる寸前で、やはり魔力のクッションにその身を支えられた。しばし間を置いてその力が消え、男子はぽとりと床に落ちた。

「一丁上がりね」

ノエルが上機嫌で振り向くと、アニーが目を白黒させていた。

「やり過ぎじゃない？」

茫然自失で床に転がる男子に目をやりながら、アニーが呆れたように言う。

「ふふん！」

ノエルは先程のアーサーに対抗したのか、殊更強く鼻を鳴らした。

一、フランソワ・ノエル・バブーフ8

ノエルが男子生徒を文字通り叩きのめしていた丁度その頃、ポチヨムとマリーは畑に出ていた。ノエルは朝の用事を手伝うと、元気に学校に出ていった。朝起きて、出かけるまでもひと騒動だった。

「いい娘ですな。ノエル殿は」

ポチヨムは出かけるまでのノエルを思い出す。

肘打で起こされると、朝からヒゲに両手でぶら下がられた。タオル代わりに毛皮で顔を拭かれるや、凍える手は容赦なく脇の下に突っ込まれた。

尻尾の固結びチャレンジは、さすがにマリーが止めさせた。だがマリーが見ていないところで、ちゃっかりヒゲを一本結ばれてしまった。

「なかなかああは、素直に育ちませんぞ」

ヒゲはマリーにほどももらった。それでも少々癖がついてしまったそのヒゲを、ポチヨムが楽しげに揺らす。

ポチヨムは今、畑を耕す手伝いをしている。もちろん前足に鋤や鍬を持って、耕している訳ではない。随分と昔に手放した農耕馬用の、農耕器具を納屋から引っ張り出してきたのだ。

農耕馬用のプラウ スキだ。鋭い杭状の木が何本かついた器具が、畑の固い土を次々と耕す。本来馬が牽引する為の縄がついており、その先はポチヨムにくくりつけられていた。

農耕馬が引っぱる代わりにポチヨムが引っぱり、マリーが乗って体重をかけることで畑を耕していた。生活の為に馬を手放してから、久しくしてない作業だ。人力よりも随分と早く、楽に畑が耕せる。

「どうにも、お恥ずかしいことに、周りに合わすということを知らない娘で……」

「いやいや。ワシのような素性の知れない者に、なかなかああは接

せられませんですぞ」

「本人は前から猫を飼いたいつて言っていましたから、多分のその代わりだと思えますよ」

「がはは。随分と大きな猫ですな」

ポチヨムは豪快に笑った。昨日まで死を覚悟していた自分が、もう腹の底から笑っている。昨日のあの死すら覚悟した思いが、嘘のように晴れ上がっている。そしてポチヨムには、それがおかしいことにも思えない。

「ははは。頭もいいし、見たところ魔力もかなりあるご様子。将来が楽しみではないですか？」

ポチヨムは上機嫌で続ける。畑で泥に塗れて働くことが、こんなに楽しいこととは知らなかった。

蹄のないポチヨムは、少々よろめきながら畑を進む。だかそんなことすら、この魔獣には嬉しい。一步一步歩く度に、確実に畑が耕されていくのが分かる。

壊すこと、殺すことしか鍛錬しなかった、軍属時代が幻のように思える。

「今の時代、ただ魔力が強くてもですね……」

「何かお困りでも？」

「この畑…… どう思います？ ポチヨムさん」

「失礼を承知で言わせていただければ…… 随分と痩せた土地でいらつしやる……」

「そうなんですよ…… 本当はいい土地なんですけど、隣の畑の地主が嫌な人でしてね…… 魔法で人の畑の養分を持ってしまったんです……」

「何ですと。ですが、お二人とも魔力はお強いご様子。それでも防ぎ切れないものなのですか？」

軍属として育てられたポチヨムには、畑仕事の苦勞が分からない。だがこの魔法世界。魔法の力が強い者は、各方面で有利なはずだ。そして二人の魔力はポチヨムをして、感心させられた程だった。

「魔力が強いのはノエルだけです。私はからきしで……あの娘には学校にいつて欲しいし、どんなに頑張ったって、畑につきつきりという訳にはいかないですし……向こうは金に物を言わせて、人を雇ってまでちよっかい出してきますしね……こっちの地主はお金があっても、魔力が弱くてね、見て見ぬ振りですよ……そのくせ小作料だけはしつかり持っていていきますし……でもね、ノエルの魔力は本当に凄いですよ。ノエルなら一人でも向こうの地主と渡り合えるんですけど、やっぱり娘の身では心配でしてね……耐えさせてるんです……」

「そうでしたか……」

ポチヨムはマリーの言葉に、反乱の同志を思い出す。

反乱に加わったのは、皆貧しい階層の出の者だ。一度貧困層に落ちると、なかなか這い上がれない。富める者は富み、貧しい者は貧しいままだ。金にあかせて、他人の物を奪う者までいれば、それは尚更だ。

「魔力が強いのは、ノエル殿だけでしたか……では昨日ワシを運んだのは」

ノエル殿一人の力か

と、ポチヨムは後に続く言葉を内に呑み込んだ。口に出して言うには、少々信じられない。そう感じたからだ。

十四、五歳の少女に、普通そんな力などない。それは口に出して言えば、我ながら嘘のように感じられる程の力だった。

一、フランソワ・ノエル・バブーフ

アニーが廊下の向こうに、いじめの相手をふわりと突き放した。
「まだやる気？」

怪我をさせないように手加減して相手を解放したアニー。言葉だけはきつく、こちらも突き放すようにそう言った。次は手加減しない。言外にそうとでも言いたげな厳しい口調だ。

「優等生气取りやがって！」

「覚えてやがれ！」

男子生徒は口々に吐き捨てる、他の仲間と廊下の向こうに消えていく。

リッキーがそれでも怯えるように身を屈めて、慌ててノエル達の下に走ってきた。

「はん！ いつでも相手になるわよ！ クラスの平穩は私が守るわ！ リッキー大丈夫？」

ノエルが呼びかけると、リッキーははにかむように黙って何度も頷いた。

「いつでも言いなさいよ。私がとつちめてやるんだから」

「まるで護民官　グラキユース気取りね、ノエル」

アニーは意気揚々と胸を張るノエルに、呆れたようにそう言う。

グラキユース　それは古代『古の共和国』で、市民の為に戦い死んでいった兄弟官吏の名前だ。

「そうよ、私はさしずめグラキユースね。グラキユース・バブーフよ。そう呼んでくれていいわ」

「そう、グラキユース兄弟気取りもいいけれど、あまりやり過ぎないことね」

アニーはそうとだけ言うと、何事もなかったかのように人垣をかき分け去っていく。

「……」

リッキーが礼を言う暇もなかった。アニーは皆の視線を背中に受けて、悠々と歩いていく。

「何よ、あのブルジョワ？ お高く止まっちゃって」

「アニーはいい奴だって。ブルジョワなのに、庶民の学校にわざわざ通ってんだぜ」

風花が慌ててノエルの横にやってくる。その隣でリッキーが、やはり無言で何度も頷いた。

「はあ？ ただの嫌みじゃない。何の為にそんなことすんのよ？」

「そう突つかканなよ。アニーの奴、あの上品さだろ？ 下々の暮らしを知る為に、あえて田舎の学校を選んだ貴族様 そんな噂すらあるぜ、アニーには」

「貴族がこんな町外れの学校に、くる訳ないじゃない。ちょっと美人で、成績がいいからって、皆持ち上げ過ぎなのよ。夢見過ぎなのよ」

「でもアニーの奴、ノエルより頭いいもんな。ビックリだよ」

風花が心底感心したように言い、リッキーがこれまたやはり黙って何度も頷いた。

「なーっ！ 私別に負けてないわよ！」

「この間の試験では、アニーが一番で、ノエルが二番だったじゃないか」

「たまたまよ！ たまたま！ いつも私が二番じゃないわ！ 私が一番の時だってあるもの！」

「それにしてもノエルとはいっても、一番を半々で分け合ってるよな。やっぱアニーも頭いいわ」

「キーツ！ 腹立つ！ あいつ大嫌い！ べえっだ！」

ノエルはもはや見えなくなったアニーの背中に、思い切り舌を出して見送った。

昼前。ポチヨムは畑仕事に精を出していた。仕事に集中すればす

る程、ポチヨムとマリーは無口になっていく。

ポチヨムは口数が減る度に更に集中し、その中でもどうしてもノエルの魔力のことを考えてしまっていた。

「マリー殿。ノエル殿は」

何故それほど魔力を？ とポチヨムが思い切って訊こうとしたその時、マリーが口元に人差し指を持っていった。静かに。そう無言で促している。

「あの娘の父親 クロードは『華の共和国』の出でしてね……」

「華の共和国というところ…… 市民革命があつたあの……」

市民革命の話はここ、冬の帝国では御法度だ。華の共和国の革命を、この冬の帝国でも再現すべしという意見を、政府は恐れ弾圧している。

ポチヨム自身も反乱には立ち上がったが、市民すら犠牲にしてよいと考える過激な革命論者には、正直言つて眉をひそめている。そう、革命論者が過激になる分、政府の弾圧も過剰になる。マリーが声を潜めたのは命の為だ。

「そうです…… 色々な国を転々と渡り歩いたらしくつて…… マリア・テレなんとかいうお姫様にも、仕えたことがあるらしいですよ…… 少佐にまでなつたとか、言つてました……」

「マリア・テレ…… もしや音の帝国では？ 少佐とは…… 凄いですぞ」

「そうなんですか？ 私はあまり詳しくないんですけど…… ヨーゼフ何世だかは、自分が育てた とか、よくホラは吹いてましたけどね。あの子の名前も、華の共和国の隠れた英雄の名前からつたそうですよ。独裁がどうの、 Kommun がどうのと言ひ出した人の名前ですわ。でも男の人の名前なんですよ。何もそのままとることもないでしょうにね」

「やはり男の人の名前でしたか。ですが、Kommun とは何ですかな？」

「さあ？ 私にはさっぱりです。ノエルは街の図書館で、色々調べ

たみたいですけど。コミュニケーションがどうか、いろいろ言ってますけど。私には難しくって……」

「そうですか。ではノエル殿の魔力の強さは、そのお父上譲りと言いかけた時、当の本人が帰ってきた。」

「たっ！ だいつ！ まーっ！」

「グオツ！」

当の本人の足の裏が、ポチヨムの脇腹を襲った。

「ガハ……」

ポチヨムが声にならない声を上げる。不意打ちな上に、脇腹にも入った。どうにもノエルはこの蹴り方が好きらしい。

「これ！ ノエル！」

マリーが思わず声を上げる。よりもよってあんな一番弱そうな所を、全く無警戒な時に、全体重を込めた飛び蹴りとは。育て方を間違ったかと、思わず天を仰ぎたくなってしまう。

「働いとるかね！ ポチヨムくん！」

「み…… 見ての通り…… ですな……」

「ポ、ポチヨムさん…… 大丈夫ですか？」

「どれどれ…… 凄い！ これ全部二人で耕したの？ いつもなら三日はかかるよ！」

「喜んでもらえて…… 何より、ですな グフツ！」

ポチヨムはそれだけ言うと、痛みに耐えかねて四肢を屈した。

一、フランソワ・ノエル・バブーフ10

昼の休息を挟んで、今度は三人で一日中畑を耕した。最後にポチヨムに手伝ってもらって、崩れかけていたあぜ道の修繕もした。気になっていたが、今まで手が回らなかったのだ。

ノエルが鋤　ハンマーをふるって土止めの板を打ちつけ直し、ポチヨムが土を踏み固めた。

「ムッ？」

「どうしました？　ノエル殿？」

「緩くなってる」

ノエルは鋤の頭部に手をやる。少し触るだけでぐらついた。

「ガタがきてますな」

「どれもこれも、ボロボロよ。鎌もそうなのよ」

ノエルは続いて軽く念じ、古びた草刈り鎌を虚空より魔力で呼び出した。

片手用の鎌だ。木の柄に大きく曲がった三日月状の刃がついている。麦類を刈るのに便利なように、掻き寄せる為の湾曲した刃を持つ鎌だ。

「鋤も鎌も古いのよね。仕方ないか」

ノエルがもう一度念じると、鎌と鋤は光を放って虚空に消えた。

「でも随分とはかどったわ。これなら、いい秋蒔き小麦が穫れそうね」

深く柔らかく耕すことができた畑を見渡して、マリーが一息ついた。本格的に雪が降り積もる季節の前に、種蒔きができそうだ。マリーは心底ほっとしたように、肩から力を抜く。

「……ポチヨムくん……」

ノエルが母に見えない角度で、ポチヨムのヒゲを引っばった。小声でポチヨムの名を呼ぶ。

「ノエル殿……　ヒゲはそうように使う為に生えている訳では……」

ポチヨムは引かれるがままに、ノエルに顔を寄せた。ノエルの端正な顔が、ポチヨムの耳に寄せられる。やはり小声で囁きかける。

「お願いがあるの……」

「何ですか？」

「お母さん！ ポチヨムくと散歩にいつてくる！」

ノエルはそう叫ぶや否や、駆け出した。ポチヨムが慌てて、後ろを追いかける。

「暗くなる前に帰ってくるんだよ！」

あつという間に小さくなるノエルの背中に向かって、マリーが心配げに声をかけた。

「ノエル殿…… 何処へ？」

ポチヨムがノエルの背中に訊いた。散歩と言う割には、えらく駆け足だ。だが四足歩行のポチヨムから見れば、むしろ合わせにくい速度だった。追い抜かない程度に歩幅を合わす。

「隣の土地の地主のところよ」

「ノエル殿…… それは……」

ポチヨムは昼前のマリーとの会話を思い出す。自分という加勢を得て、地主に仕返しにいくつもりなら止めなくてはならない。

ポチヨムはいつまでも、ここに居られるとは思っていない。何より娘の身を案じて耐えている、母の気遣いが無駄になる。

「ちよつと脅かすだけだよ。ポチヨムくんの姿を見せてやれば、誰だつてビククリするもの！」

「しかし……」

「大丈夫だつて！ 大地主のくせに、気が小さいのよ、あいつ。ポチヨムくんの姿を見たら、震え上がって家から出てこなくなるわ」

「ですが……」

ポチヨムの表情が曇る。ここでノエルに怪我でもさせては、マリーに申し訳が立たない。

「近づけなきゃ、悪さもできないでしょ？ 家を留守にするといつもお母さんが心配なのよね」

「ノエル殿……」

ポチヨムはジッと、駆けるノエルの背中を見つめる。どんなで時
も、お互いを気遣う親子なのだろう。魔獣の胸を、何か熱いものが
込み上げる。

ポチヨムは沸き立つ思いのままに四肢に力を入れ、一息にノエル
の前に出た。

「ノエル殿！ 背中へ！」

ポチヨムが叫ぶ。

待つてましたと言わんばかりに、ノエルがその背中に飛び乗った。
ポチヨムは一気に加速する。ノエルに合わせていた時とは比べ物
にならない、野生動物の走りだった。

「凄い！」

「まだまだ！」

ポチヨムは己の四肢に魔力を込めた。野生動物を超越した、魔法
のマスコット猛獣としての、真の力を解放する。溢れ出る思いのま
まにポチヨムは雪道を駆けた。

その速さ故にたなびく髪を流れるがままにして、ノエルは風を
ポチヨムの力を全身で感じる。

「凄い！ 凄い！ 速い！ 速い！」

ノエルは大興奮だ。

「さすが！ ポチヨムくん」

「ははっ！」

ポチヨムが笑って、更に加速する。この少女の期待に応えること
が、誇らしくて仕方がない。

「百獣の王！」

「それ！ 違っ」

ポチヨムはカーブを一つ曲がり切れず、雪山に突っ込んだ。

一、フランソワ・ノエル・バブーフ11

「陛下。国内の反乱分子は未だ、掃討し切れていません。鉄の帝国との戦線も、芳しくはありません」

魔法皇帝直属の僧侶は、皆の意見を皇帝に伝える為に、冬の帝国皇帝 ニコライ二世に謁見していた。この帝国の魔力と国力の象徴である皇帝は、敬意を持ってこう呼ばれている。

マジカル・ツァーリ 魔法皇帝 と。

「そうか……」

皇帝は呟くように応えた。

国内の反乱は後を絶たない。やむなく参戦した魔界大戦も、戦果は芳しくない。当初は祖国防衛の愛国心が、反乱分子を押さえ込む役割を果たしていた。

国内はまとまり、外敵は排除され、国民は高揚感に酔い、生活の苦しみを一時的にでも忘れることができる。それが今まで戦いだった。今回もその効果を期待していた。

だが今回の魔界大戦は、今までの国家間の戦いとは、全てが違っていた。今までの戦いは、言わば会場だけの戦いだった。代表が出ていき戦う。そんな感じだ。

後に第一次魔界大戦と呼ばれるようになる今回の戦いは違う。

総力戦とでも言うべき状況になり、国の全てが戦いにつき込まれた。戦費。兵士。食料。そしてもちろん魔力。全てが国全体を圧迫した。

そのツケは国民に向かった。特に貧困層は、その最たるものだ。

「国内に残る革命論者…… 杉ケレンは言うに及ばず、亡命中の川人レナや、瀬月レオン。流刑中の星リンも含めて早めに処分せねば、他の民衆も反乱に手を貸しかねません。そうなればもはや反乱ではありません」

「……」

皇帝の顔は苦悩に歪む。

「革命です」

皇帝直属の僧侶は、私情を込めずにそう言った。

ポチヨムは自分の甘さを呪った。ノエルが自制するなど、まず無理だったのだ。

「あはは！」

ノエルはポチヨムにまたがったまま、隣の土地の地主の屋敷に雪崩れ込ませた。

「ノ、ノエル殿！」

「いいのよ、ポチヨムくん！ このまま馬小屋から回って！」

「し、しかし……」

「近所の子供が、飼い猫連れて遊びにきただけ。何もおかしいことなんかないわ。ポチヨムくんは、猫の振りね！」

「そ、それは……」

「返事が違うわ、ポチヨムくん！ 今のポチヨムくんは猫よ！ 返事は、ニヤーツよ！」

「ニヤ？ ニヤーですか？」

迫りくる魔獣の匂いと気配に、小屋の馬達が驚きいらないた。敷地に放されている犬達も、遠巻きに吠えかかってくる。

馬と犬の声に驚かされた鶏の、悲鳴にも似た鳴き声が、ノエルの家の畑よりも広い敷地に響き渡る。ポチヨムと敷地を一周すると、屋敷の前でノエルはその背中から降りた。

「何だ？」

家畜の声に驚き、最後に声を上げたのは屋敷の用心棒だった。

用心棒は手に櫂の木の棒切れを持ちながら、慌てて屋敷から飛び出してきた。昔は筋肉質だったであろう小太りの中年男性が、押っ取り刀で駆け寄ってくる。

「てめえ！ バブーフの小娘！ 何しに」

だが用心棒はそこで息を吞んでしまふ。その小娘の背後にいるのは、大きな虎だったからだ。

「こんにちは。セルゲイ。地主さんはお元気？」

「何だ…… と、虎？」

「いやね、猫よ。今度家で飼うことにしたから、ご迷惑かけないようにご挨拶にきたの」

「ニャ…… ニャー……」

ポチヨムがぎこちなく鳴いてみせた。

「可愛いでしょ？」

「何処がだ！ どう見ても、虎じゃねえか！ 脅しか？ 日頃の意趣返しかな？」

「あら、ご挨拶よ。言ってるじゃない？ 地主さんは、お屋敷の中？ お邪魔していい？」

ノエルは歩き出し、セルゲイと呼んだ用心棒の横をポチヨムとともに通り過ぎる。その様子はまるで無警戒だった。

「く…… お前にする挨拶は これだ！」

セルゲイは振り返り、出し抜けにノエルの背中に棒切れを振りかざした。

なっちゃんいないですな

そう呆れながら、ポチヨムが首だけ振り向く。セルゲイの腰の入っていないその動きに拍子抜けした。軍隊に入ったら、ポチヨムが一から鍛え直すところだろう。

それでもノエルを危険にさらす訳にはいかず、ポチヨムは魔法の障壁を展開しようとした。

「はい！」

だがポチヨムよりも先に、魔力を放ったのはノエルの方だった。体を軽やかに翻し、左手を内から外へと振る。何もなかった左手に握られていたのは、先ほど古いと言った草刈り鎌だ。

そのノエルの一振りに、セルゲイの得物はあっさりと弾かれた。

「がっ！ この……」

「ふふん」

ノエルが鼻で笑う。無理もない。鎌は触れてもいないのだ。鎌から放った魔力が、振り上げていたセルゲイの棒切れを弾いていた。ノエルが後から動いたにもかかわらず、この用心棒は振り下ろすことすらできなかった。

「小娘が！」

「小娘って失礼ね！ちゃんと大きくなってるわよ」

「あん……」

セルゲイは一度視線を下に向け、

「ははっ！」

ノエルの胸辺りで鼻を鳴らして顔を上げた。

「失礼な！ポチヨムくん、下がっていて！」

ノエルは更に念じる。今度は右手に鎚が現れた。

ポチヨムは言われるがままに、後ろに二歩三步と下がる。そこは気がつけば玄関前だった。

二人の実力の差は一目瞭然だ。ここからでも十分、何かあっても対処できるだろう。

「食らいな！小娘！」

セルゲイが得物を振り下ろした。一撃目を軽くあしらわれたせい、か、先ほどより力の入った唸りが空気をつんざく。

その棒切れを受け止めたのは、やはりノエルの左手の鎌だ。

そのままスパツと切れるところをノエルは想像したが、もちろんただの鎌にそこまでの切れ味はない。ならばとノエルは鎌を払い、セルゲイを押し戻した。

ノエルは地面を蹴った。セルゲイからすれば、大地を滑るように飛んできたかのように、見えたかもしれない。相手の懐に難なく侵入したノエルは、そのまま右手の鎚を軽く突き出す。

「が……」

顎を強打したセルゲイが、目から火花を散らしてのけぞった。そのまま押し込めば、ノエルの勝ちは決まっていただろう。

だがもう少し懲らしめてやりたい。仕返しにこないように、実力差を分かせてやりたい。ノエルはそう思ってたか、手を止め身構え直す。

ポチヨムのいる今なら、相手をやり込めておけば、おいそれと手出しはできなくなるだろう。ノエルは完膚なきまでに叩きのめすべく、相手が体勢を整えるのを待った。

「ぜ……ぜえ……」

「あら？ もう息が上がってるわよ」

ほざけと、言ったらしき息を漏らして、セルゲイが木切れをふるう。

「当たらないわよ！ そんな力任せの攻撃！」

食らえと、動かしたらしき唇の動きを見せながら、セルゲイは闇雲に得物を振り回す。

「そつちこそ、食らいなさい！ 『鎌と鎚の挟撃』！」

ノエルが両手を同時にふるう。外から内へ同時にふるわれた鎌と鎚は、振り回されていたセルゲイの檜の木の棒切れを挟み込み、木っ端みじんに砕いた。

「な……」

「終りね」

たいしたものですなと、ポチヨムはノエルの一連の動きに感心する。

ポチヨムはノエルの動きを全て見ていた。ノエルが勝つだろうとは思っていた。だがそれにしてもこれほど無駄なく動き、相手を押さえ込むとは思わなかった。

「溢れんばかりの魔力に、この身のこなし…… 特別な何かを感じますな……」

ポチヨムは一人頷く。その背後で、

「うるさいぞ、セルゲイ。どうした？」

下腹を見事にたるませた、初老の老人が玄関から現れた。老人は玄関を出たところで、何か柔らかいものにぶつかる。表面はごわご

わとした毛に覆われ、その中身は分厚い筋肉と強固な骨からなる、
獣臭いものに視界を遮られた。

「セルゲイ。何だ？ 馬か？ 牛か？ 繋いでおけ」

「……」

ポチヨムがゆっくりと振り返った。そのあまりに緩い気配に、警戒することすらしなかった。

見る見ると青ざめる地主らしき人物が、ポチヨムと目が合って固まっている。目を思い切り丸く見開き、少しでももつつけばその場で倒れそうだ。

「ニャー……」

ポチヨムがとりあえずそう挨拶をすると、

「ッ！」

つつく必要もなく地主は背中から倒れていった。

一、フランソワ・ノエル・バブーフ12

「あはははっ！ サイコーッ！」

ノエルは腹を抱えて笑った。

隣の土地の地主 憎い富農の、驚き青ざめた顔が忘れられない。
あんな顔のまま気絶ができるなどと、ノエルもポチヨムも思ってもみなかった。

「がはははっ！ これでしばらくは、手を出してこないですか？
ポチヨムも快活に笑う。家路の途中だ。

「そうかな？ やっぱもっと徹底的に、怖がらせた方が良かったかな？」

「はは。やり過ぎないことですよ」

「いいのよ！ いいのよ！ 独り占めするような奴は、あれぐらいでいい薬よ！」

ノエルは楽しくって仕方がない。家に帰るまでに、この楽しい話題を二人で話し切らないと、母にしゃべってしまう。その自信がノエルにはあった。

「独り占めはよくないですな。がはは」

「そうよ！ 独り占めよくない！ 独裁反対！ あはは！」

「はは。しかし、たいした鎌と鎚捌きでしたな」

「まあね。他に武器らしい武器も手に入らないし、我が身を守るうちに自然と身についたの」

「ですが確かに、あんな使い方をしているのは、傷むのも無理ないですな」

「あはは。滅多にあんな風には、使わないわよ。私だって、普通の女の子だもん」

「がはは。それはどうですか？」

「何を！ あはは！ でもいいわ！ 気分がいいわ！ 学校でのストレスが、吹っ飛んだわ！」

「ストレスですか？」

「そうよ！ 学校に一人、嫌みなブルジョワがいるのよ！」

「おや、マリー殿の為かと思っていたら、自分の憂さ晴らしの為でしたかな？」

「あはは！ いやね、ポチヨムくん！ ストレス発散は、ついでに決まってるじゃない！」

「がはは、そういうことにしておきますかな。そうそう、それとノエル殿。これを」

ポチヨムが念じると、ノエルの目の前にガラスの小ビンが現れた。細長い円柱のガラスに、旋回式の鉄の蓋がついている。歩く二人の速度に合わせて、目の前で宙に浮いていた。

「何？ ポチヨムくん？」

「薬ですな」

「薬？ へー」

「雪山に突っ込んだ時の擦り傷を、治しておいた方がよいですぞ。マリー殿が心配しますからな。劇薬ですので、一口だけ舐めて下され」

「ゲハッ！」

言われるがままに小ビンに手を伸ばし、一口だけ口をつけたノエルがむせ返る。

「……ゲホッ！ グ…… カハッ！ ……きつつ！」

「ははは。直接傷口に塗っても効きますが、やはりグイッといくのが一番。まあノエル殿には、まだ早かったですかな」

「ゲホッ…… 何これ？ 傷が見る見る治っていくんだけど？」

ノエルの擦り傷が、瞬く間に塞がっていく。跡すら残らない。ノエルは疲れすら、吹き飛ぶように感じた。

「超タワーリン。ワシの名前ゆかりの魔法の薬ですな。ワシはタワーリンが超スキーでしてな」

「でも、一口でも…… きついわよ…… これ…… ケホ！」

「強過ぎる薬は劇薬。毒ですからな」

ノエルの傷が癒えたのを確認すると、ポチヨムは目を細めて笑う。
続いて軽く念じると、ガラスの小ビンが虚空に消えた。

「お灸も薬だもんね」

お灸をすえてやった悪徳地主の、青ざめた顔がまたもやノエルの
脳裏に浮かぶ。

「あはは！」

「がはは！」

二人でたんまりと、その後も悪徳地主の青ざめた顔を笑いにし
て、家に帰った。

一、フランソワ・ノエル・バブーフ13

「ただいま！」

「おかえり」

ノエルとポチヨムが家に帰り着くと、マリーが腕によりをかけてご馳走を用意していた。

久しぶりの贅沢だ。何日もかかると思った畑仕事があつという間に終わつたのだ。ポチヨムへの礼も兼ねて、これぐらい贅沢しても罰は当たらないとマリーは思ったのだろう。

ボルシチに、ピロシキ、その他数種類のパン類。滅多に並ばない肉もあれば、盛りつけられた野菜はとても色とりどりだ。

「マリー殿…… これは……」

ポチヨムはその料理の数々に、目を見張る。客人に最上級のおもてなしをするのが、冬の帝国人気質とはいえ、これではあまりに贅沢だ。巨躯を誇るポチヨムでも、そう思ってしまう。

沢山の料理が、ポチヨムの為に床に置かれている。マリーは自分達の分も、床に置き始めた。ポチヨムに合わせて、床で食事をしようというのだ。

「いいんですよ。今日だけ。ね」

「そうだぞポチヨムくん！ ポチヨムくんは立派な労働力だ！ 農耕虎だ！ 遠慮するな！ その代わり、明日から血反吐いても、また働いてもらうからな！」

「これ！ ノエル！」

「ウヘッ！ そうだポチヨムくん。何かお話してよ。魔法のマスケットト猛獣でしょ？ 色々戦ってきたんでしょ？」

「あ、いや……」

ポチヨムは黙ってしまう。祖国の為に、戦う力をつけた。だが最後に本当に力を発揮したのは、その祖国に牙を剥ける為だった。自らの名がついた戦艦で、ポチヨムはあまりに貧しい兵士達の為に立

ち上がったのだ。

「ん、どうしたの？ ポチヨムくん」

「いや、ワシは……」

魔法皇帝はポチヨムを貴族にしてくれた。その大恩ある人物に、自分は齒向かったのだ。

今でも後悔はしていない。あの悲惨な兵士達を見て、そしてその後ろにいるであろう、更に悲惨な家族を思えば、声を上げずにはいられない。

「ワシの戦いは……」

艦隊を監督する提督に、まずは兵士の待遇改善を求めた。話し合っただけで済ませるつもりだった。しかし所詮は獣 いや魔物と侮られ、提督は意に介さなかった。

話し合いが長引くうちに、兵士達の我慢が限界に達し、暴動が始まった。

ポチヨムは暴動を煽動したとされ、その場で取り押さえられた。次々と打ち倒されていく兵士達。ポチヨムは気がつけば提督に傷を負わせ、兵士達の下に駆け寄り、反乱分子の一人 いや先導者になってしまっていた。

「いいのよ。ポチヨムさん…… 言いたくないのなら……」

「どうして？ ポチヨムくんの活躍！ 私、聞きたい！」

「ノエル！」

「ハッ、ハイツ」

ノエルは母の滅多に見せないあまりの剣幕に気圧されて、珍しく素直に従った。

ポチヨムがバブーフ家にきて、数ヶ月が過ぎた。

ポチヨムはすぐにでもバブーフ家を去るつもりだった。

だがノエルもマリーも、ポチヨムに温かく接してくれる。居心地がいい。手が回らないのか、追っ手が迫ってくる気配もない。

いつしか当たり前のように、ポチヨムはノエルの家に住むことになった。今は労働力をこの家族に提供できる自分が、ポチヨムは誇らしくて仕方がない。

ポチヨムは労働力だ、農耕虎だ、何だと言われながら、ノエルとともに畑仕事に精を出す。

「あはは！ ポチヨムくん凄い！ これ、ポチヨムくんだよね？」

そして年も押し迫ったノエルの誕生日 クリスマスイブ。ポチヨムはノエルにプレゼントを用意した。

入れ子構造になった虎の人形だ。人形の中に人形が入っているマトリョーシカと呼ばれるおもちゃで、ポチヨムが見よう見真似で、魔力で虎の形に作り出したものだった。

「ポチヨムくん、ちっちゃ！ でも本当にこの大きさなら、膝に乗せて上げられるのに！」

ノエルが興奮に鼻を膨らませて、一番小さな虎をその大きさ故に摘まむように持ち上げる。

「がはは。そのサイズでは、農作業ができませんぞ」

「あはは、そうね。穀潰しは追い出されちゃうわね。あはは！」

「追い出されますかな？」

「容赦なく追い出されるわよ！ たとえポチヨムくんといえども！」

「これノエル！」

「あはは！」

「がはは！」

マリーが声を荒らげるが、ノエルとポチヨムは構わずお腹の底から笑い声を上げる。

「でもまだまだね！ ポチヨムくん！」

「何がですか？」

「貧農の我が家では、おもちゃよりも鎌とか鋤のような、実用品の方が喜ばれるのよ！」

「そう言えば、少々痛んでおりましたな。乱暴な使い方をする誰かさんのせいで」

ポチヨムがいかにも誰のせいか思い出せないと言わんばかりに、
わざとらしく小首を傾げた。

「何を？ あはは！ 食らえ！」

ノエルはイスの上に立ち上がり、ポチヨムのお腹に足先から飛び
込んだ。

「グオツ！ がはは、何の！」

こうしてノエルの小さな家は、大きな笑いに包まれながら新年を
迎えようとしていた。

この翌年以降 時代が流血を伴って大きく動き出すとは、

「あはは！」

「がはは！」

この時ノエルもポチヨムも知る由もなかった。

二、血の日曜日1

「あははっ！ 風花おっはよ！」

年のあらたまった一九〇一年一月。今年初めの授業の日。
ノエルは学校の廊下で新年早々風花に飛びかかった。

「またか？ ノエル！ 何で人の背中に飛びつくんだよ？」

「風花のこの巻き毛！ 可愛いわ！ 堪らないわ！ 顔を突っ込まずには、いられないわ！」

「あいな！」

「あはは！ もふもふよ！」

振りほどこうとする風花に揺られ、ノエルは狭い廊下で足を振り回す。

「ちよつと、邪魔よ……」

「聞いてよ風花！ クリスマスに誕生日プレゼントもらっちゃった！」

不意に後ろで声がしたが、ノエルは気がつかない。暢気に風花にぶら下がったままだ。

「プレゼント？ 何を？ 誰に？ そんな余裕あんのかよ」

「あはは！ 何とウチの労働猫からのプレゼント！ この間、会わせてあげたでしょ？」

「あれ、猫かよ…… それに、大きな声で言っちゃダメだろ」

風花はノエルの言葉に、昨年紹介されたノエルの猫を思い出す。
家族とともに家に招待され、皆で腰を抜かした。訳ありのようなので黙っているようにと、風花は父 ライカから釘を刺されていた。

「ちよつと、聞いているの？」

後ろの声は苛立たしげに震えている。完全に無視されていたからだ。

「風花はもう知ってるもの。大丈夫よ、猫だって話なら」

「けどよ……」

「邪魔って言ってるでしょ！」

「ん？」

その背後の大声にノエルがやっと振り返る。見るとブルジョワの少女アニーが、そこには苛立たしげに立っていた。

「邪魔よ。何廊下で騒いでんのよ？」

「あらブルジョワさん、おはよう。お邪魔だったかしら？」

ノエルは風花の背中から降りて、澄ました顔で振り返る。

「ええそうよ。邪魔って、言ったのよ。フランソワーズさん」

「フランソワよ」

「私だって、アニーよ。ブルジョワさんじゃないわ」

「ノエルもアニーも、何でそう会う度に、けんか腰なんだよ？ 仲良くしろよ、お前ら」

間に挟まれた風花が、困惑顔で仲裁しようとする。

「ふん」

だがアニーは鼻を一つ鳴らすと、ノエル達の脇をすり抜けていった。

「何よ。それにしても不機嫌ね、ブルジョワの奴」

「最近街も、デモやら、ストやらで荒れてるからな。革命がどうの、同志がどうのって、うるさいだろ？ 聞いた話じゃ、親の反対を押し切って学校にきてるってさ、アニーの奴」

「はあ？ なら、無理してこなくていいのに」

「アニーにだけは、本当容赦ないな、ノエルは？」

アニーにだけは冷たくあたるノエルに、風花は肩をすくめて呆れてみせた。

二、血の日曜日2

そしてその週の日曜日。

惨劇の日

ノエルは久しぶりに、聖教会の日曜礼拝に参加していた。ノエルの通う教会は、首都サントペルブルクにある。町中の賑やかな教会だ。母は家の用事で、滅多にこれない。ポチヨムはもちろん、町中には入ってこれない。

ノエルは今日、馬車に便乗させてもらい一人で礼拝にきた。

「ガポン司祭様！」

「やあ。フランソワ・ノエル・バブーフ。久しぶりだね」

神の祝福を受ける為、信者が列をなしていた。列の先頭にきた少女が、一際元気な声で司祭の名を呼んだ。

司祭は生え際が、少し後退してしまった頭をかく。久しぶりに見た少女は、少々大人になっていた。その不意打ちに司祭は何だか照れくさくなる。

だがノエルはそのことに気がつかない。

「へへ。お久しぶりです。司祭様」

「半年振りぐらいだね、ノエル。マリーさんは元気かね？」

ガポンと呼ばれた司祭は、それでもノエルの顔を見て、その母まで思い出した。

ノエルは人目を引く。容姿もその振る舞いも、人の気を惹く不思議な少女だ。誰でも一目見れば、忘れられない。

「元気です。相変わらずうるさいけど」

「はは。ダメだよ。お母さんの言うことは、ちゃんと聞かないと」ガポン司祭が、ノエルに祝福を与える。自然に笑みがこぼれる。ノエルと話をしているだけで、自然と笑顔になってしまう。本当に不思議な娘だと、司祭は思った。

人にあらざる魔法のマスコット猛獣が、司祭と同じ思いを抱いた

ことは、もちろん知る由もない。

「二人分やつて！ 司祭様！」

「これこれ」

「どうしてもこれない友達がいるの！ その子の分！ 形だけでいいから！」

「足でも悪いのかい？」

「足は丈夫ですよ、その子。むしろ人より多いくらい」

「はは。冗談はおよし」

ガボン司祭はそれでも、ノエルにもう一度祝福を与える。ノエルの頼みを断れない。無邪気な言葉。屈託のない笑顔。裏表のない態度。かげりのない瞳。生きる喜びに赤く染まる頬。

ノエルの全てが、聖職に生きた自分に対するご褒美のように司祭には思えた。

「聖母様……」

司祭は思わず呟く。

そうノエルの笑顔は、まるで聖母が使わした何かの徴しるしのように思えてしまう。

いや。もつと正確に言えば

「はい？ 何ですか？ 司祭様」

「はは、何でもないよ…… お友達によろしくね」

「はい。司祭様」

ノエルは一礼すると、列を離れた。司祭が笑顔で見送る。その隙に司祭の横に控えた、別の司祭がガボン司祭に耳打ちをした。

「……分かりました…… この人達に祝福を与えたら…… 私も参ります……」

ガボン司祭の表情が一瞬だけ陰る。

その陰を振り払うと、司祭は次々と信者に祝福を与える。もちろん笑顔で、心底信者の幸せを祈って儀式を続けた。だが今の耳打ちに、心の何処かが奪われたままだった。

「数万人規模の抗議行動…… その先導……」

司祭は小さく呟いて、己の使命を噛み締める。

この日の前日。冬の帝国の全土で、政府に対する大規模な抗議行動が行われた。疲弊した経済活動と、それに伴う弱者へのしわ寄せ。その抗議だ。

そしてガボン司祭は今日、更に市民の窮状を訴える為の、デモ行進の先導をすることになっていた。その準備が整ったとの連絡だ。

司祭も初めは断った。だが一人の少女に心を動かされた。

少女は黒髪を頭の両脇でまとめ、優雅に肩に向けて垂らしていた。花売りだという少女は、生活の窮状を訴える。家族の苦しみを切実に訴える。

輝く澄んだ瞳を潤ませて、神と皇帝の慈悲を少女は司祭に乞うた。少女の懇願を受け入れ、ガボン司祭はデモの先導を引き受けた。魔法皇帝は分かち下されると、司祭は祈るような気持ちで思う。

冬の帝国は、革命論者の思惑に乗らない。皆で力を合わし、この困難に立ち向かう。国を二つに割るようなことにはならない。司祭は自分にそう言い聞かせる。

だが、命が懸かっている訳ではない。国は浮き足立っており、人々は色めき立っている。それは市民も、兵士も同じだ。司祭は樂觀も、悲觀もするまいと心に誓った。

祝福に並ぶ信者の列は、終わろうとしていた。あと数人。この信者達に祝福を与えれば、命懸けの抗議に出かける。司祭は我が身が引き締まる思いがした。

信者は残り二人になっていた。大きな男性信者の後ろに、少女のものと思しき長い黒髪が揺れているのが見える。ふと、司祭はノエルのことを思い出した。

先程のノエルの姿に、司祭は聖母の徴を見た。いやもつと正確に言えば、聖母そのものを見た。思わず呟いたのはその為だ。

最後から二番目の男性信者に祝福を与えた後、しばらく目をつむって祈ってしまう。

聖母様の祝福もある

何故か司祭には、そう思えた。ノエルの笑顔が自然と目に浮かぶ。あの屈託のない笑顔。聖母の祝福そのものに思えた。

ノエルの笑顔。そして生活の窮状を訴えた少女の輝く澄んだ瞳。ガポン司祭は、ああいう子供達の為に、自分は命を懸けるのだと覚悟を決める。

たとえ二度とあの笑顔に会えなくても
司祭がそう覚悟を決めて目を開けると、

「司祭様！ お母さんの分もお願い！」

最後尾に並び直していたノエルが、やはり無邪気な顔で微笑んでいた。

二、血の日曜日3

ノエルが母の分も祝福を受けて教会を出ると、沢山の市民が教会を取り巻いていた。

ミサはミサ。集会は集会。分けて集まって欲しい。デモに集まるのは、危険を承知の人間だけ。ガボン司祭の願いだった。

「お嬢ちゃん。ミサはもう終わったかい？」

「えっ？ あ、はい」

一人の市民の問いかけに、ノエルが戸惑いながら答える。ノエルは何故そのようなことを訊かれるのか、どうしてこれほどの人が集まっているのか分からない。皆真剣な顔をしている。

「ノエル…… さあ…… お家に帰りなさい……」

ノエルに続いて出てきたガボン司祭が、優しくノエルの肩を抱いた。

「ガボン司祭！」

「司祭様！」

教会の前に集まった人々が、口々に司祭の名を呼ぶ。

「司祭様…… 皆なんで集まってるの？」

「ちよつとね…… ノエルは危ないから帰りなさい」

いつになく険しい顔をした司祭が、ノエルの背中を押す。ここには巻き込まれる。危険を冒すのは、自分達だけ。そう考えてか司祭は、ノエルを市民の中に優しく押しやった。

ノエルは戸惑いながら、市民の奥へと歩いていく。

周りを固める大人達。皆険しい顔をしている。祈るような顔をしている者もいる。

「何があるんですか？」

ノエルが近くにいた大人の一人に訊いた。初老の男性だ。疲れた目をしていた。

「デモだよ」

「デモ？ デモって、あの抗議に歩くやつですか？」

「そうだよ。皆で皇帝陛下に、現状を訴えにいくんだよ」

別の女性が、ノエルに答える。ノエルの母と同じぐらいの年に見えた。

「現状？」

ノエルが女性に振り向くと、すぐ後ろの男性が叫んだ。

「俺達は苦しい！」

ノエルが驚いてそちらに振り返ると、多くの者がそれに応えるように叫んだ。

「そうだ！」

「政府は何をしている！」

次々と怒号が上がる。それはガポン司祭の意図したことではない。「皆さん落ち着いて」

司祭がなだめる。これはあくまで、魔法皇帝に現状を訴える為の集まりだ。市民の窮状を伝え、魔法皇帝の慈悲を請う貯めの集まりだ。

皇帝は教会の守護者。自分が立ち上がれば、きっと伝わるはず。司祭はそう信じている。そしてその為には、先ずは皆が冷静にならなくてはならないとも知っている。

「皆さん。冷静に。我々は争いにいくのではないのです。話し合いにいくのです」

「だが司祭様……」

「お静かに。今は忍ぶのです。肅々と。我々の姿を、皇帝陛下にお伝えするのです」

市民が黙った。

ノエルはその市民達の中で、首を巡らす。工場勤務の者。ノエルと同じ貧農と思しき者。戦地帰りと見える者。皆貧しい身なりと、険しい顔をしている。

「いきましよう」

ガポン司祭が力強く頷く。教会の前を離れ、歩き出す。目指すは

冬の宮。魔法皇帝の下。

「……」

動き出した市民の中で、ノエルも歩き出した。目をそらしてはいけなことが起こっている。そう感じたからだ。

首都サントペルブルクは、異様な雰囲気にも包まれていた。

前日の土曜日、大規模な職務放棄 ストライキが組まれた。先導したのは国内に潜伏した、空想科学的社会意義者達。

多くの工場が操業を停止し、工員が待遇の改善を求めて工場に座り込みをした。

業を煮やした工場主の一部は、軍隊に出動を要請した。軍は治安維持を名目として、要請のあった工場の周辺を兵で固めた。

まさに一触即発。工員と兵士が、工場の内と外で睨み合う。

それでもストは続行され、街全体を張りつめたような緊張感が包んだ。日が暮れるまでストは続き、軍は撤収した。

ストは一応の目的を果たした。多くの者がそのことに安堵し、達成感を噛み締めていた。

だが一部の者は、軍が退いたのは、次の事態に備える為だと分かっていた。

ストライキは言わば『静』の抗議運動。この成功に酔う者は、次の成果を求めるだろう。目に見える成果を欲するだろう。

そうなれば次は『動』だ。実際翌日曜日には、教会の司祭の先導によるデモ行進が計画されていた。

ほんの少しのいき違いで、パニックになりかねない。それを押さえる為にも、聖職者が先導を買って出た。だが

冬の宮を目指す市民の数は、折からの雪にもかかわらず、時間が経つに連れて増えていった。先導するのは教会の司祭。そのガボン

司祭には、内心焦りがあつた。

「多い…… これほどの市民が参加するとは……」

予想以上の数の市民が、デモ行進に参加した。デモの道に選んだ、この首都最大の目抜き通り　ネフスキー大通りが、市民で埋め尽くされている。

いや多過ぎると、ガボン司祭はその数に困惑する。

デモに参加する市民の数は、それはそのまま困窮を訴える力になる。

だがあまりに多過ぎる参加者は、全体の統率にかかわる。革命を望む過激派が、これを好機と捉えるかも知れない。

ガボン司祭はあえて、白青赤が上から横長に並んだ三色旗を、仲間に掲げさせた。

国旗だ。白が高潔。青が正直。赤が勇氣。それがこの色に込められた意味だ。

国を割るようなことは、許しはしない。その決意の為に、この旗の下でガボン司祭は皆を行進させた。

「お守り下さい……」

雪に翻るその旗を一度見上げて、司祭は聖母に祈りを捧げた。

二、血の日曜日4

首都サントペテルブルクの冬の宮。それは魔法皇帝の居城。離宮として建てられたその豪華な建造物は、城としては堅固なイメージを見る者に与えない。

冬の長く厳しいこの国において、左右に大きく広がるその宮殿は、まるで凍える我が子を抱き締めようとする母親のような懐の深さを感じさせた。実に女性的で柔らかな城だ。

実際運河　ネヴァ川こそ天然の要害として背後に要するが、前面は人々が集まれる広場になっていた。それもまたこの宮殿の寛容さを表していた。

そして飾り窓が悠然と並ぶその姿は、触れれば砕けるかと思われる程優美だ。まさに雪の結晶のような儚さときらびやかさで、この地を訪れる人々を魅了していた。

この国の冬の姿そのもののような冬の宮は、冬の帝国の民にとって誰しもが仰ぎ見る誇りの建物だった。まさに皇帝　ツァーリの住まいに相応しい宮殿だ。

その冬の宮前の広場で、デモ隊と兵士が睨み合っていた。

冬の宮前で待機する兵士達は、極度の緊張状態にあった。冬の宮は魔法皇帝の住まい。そしてデモの最終目的地。士官は魔法皇帝から命令を受けている。どんなことがあっても、市民に危害を加えてはいけないと。厳命だった。

市民への危害は厳禁だと言う。しかしそれは、この数を想定した上での命令だろうか？　冬の宮前を固める軍隊の士官はそう思う。このまま数に任せて冬の宮に雪崩れ込まれては、魔法皇帝を守れない。士官はやはり苦々しくそう思い、デモを先導した司祭を見つめた。

「皆さん落ち着いて下さい」

そのガボン司祭は、ともすればいきり立つデモ隊をなだめること

に、多くの神経を使っていた。市民の怒りは伝えなくてはならないが、まともに怒りをぶつける訳にもいかないのだ。

「ガポン司祭。市民を解散するように」

幸い士官は冷静な人物だった。武器など持たない司祭に合わせて、士官も丸腰で前に出る。サーベルすら部下に預ける慎重さを見せた。兵士達にも銃口を空に向けさせている。

「分かっています。ですがまずは何らかのお約束が欲しい」

「約束　ですか？」

「はい。集まった市民の数が、それだけ我々の窮状を表しているのだと、思っていたきたい」

「魔法皇帝は慈悲深いお方。元より臣民の生活には、深く心を痛めていらつしやる」

だから言われるまでもない。そういう否定の言葉だ。そう言つて士官は、まずは軽く拒否の姿勢を見せる。簡単に要求を通しては、市民の中に達成感が湧かないからだ。

「魔法皇帝は聖教会の守護者。民の味方。元より我々の窮状を察し、心を痛めていらつしやることは重々承知しております」

「ほう……」

「ですが。あらためてお願い申し上げます」

ガポン司祭は内心の焦りと戦う。要求がすぐに通るとは思っていない。またすぐに受け入れられるよりは、多少時間をかけて要求を通した方がいい。その方が難しい望みを、魔法皇帝が聞き届けて下さったと、市民の心証を良くすることができるからだ。

相手の士官も心得ているようだ。

だが市民の数が多し。それだけに市民以外の者も潜伏しやすい。過激な革命論者が潜伏していると見て間違いない。彼らが何らかの行動を起こす前に、約束を取りつけないとならぬ。

革命論者も機会を窺っているはずだ。要求が出切っていないのに過激な行動に出て、周りを煽動することはできない。かといって機を逃しては、平和裏に終わってしまう。

早過ぎず、遅過ぎず。駆け引きの終わりを、彼らは見極めようと
しているはずだ。

「聖教会の守護者であらせられます、魔法皇帝ニコラ」
司祭の言葉が終わる前に、小さな物影が頭上を飛んでいった。

「ッ！」

司祭と士官が同時に互いの目を見る。投石だ。不満を暴力の形に
表した小さな石だ。だがこのたった一石が、暴動のきっかけになり
かねない。

石は最前列の兵士の胸に当たって地面に転がっていく。その乾い
た音が広場に響き渡った。

兵士が息を呑み、市民がざわめいた。

「皆さん！ 冷静に」

ガボン司祭はすぐさま振り返る。

冬の宮前の市民と兵の間に、触れれば破裂するような緊張感が漂
っていた。

次の石が飛ぶ前に、この投石に正義などないことを分からせない
といけない。

パン……

だが投石に続いたのは、小さな銃声だった。

「グッ」

兵士に背中を見せていた司祭が、背後から撃たれた。受け身もと
れないままに地面に倒れる。

「キヤーツ！」

市民から悲鳴が上がった。

「誰が発砲を許可したか！」

士官が叫ぶ。だが叫びながら気づかされる。革命論者は兵士の中
にも紛れ込んでいたのだ。

「このっ！」

「司祭様を守れ！」

「あいつらを許すな！」

次々と市民が　そしてその中に紛れた革命論者が　怒号を上げる。雨霰と投石が始まる。

「待て！　動くな！　発砲は許可しない！」

今にも各々の判断で銃を向け出した兵士を、別の士官が抑える。市民への危害は許されていない。魔法皇帝の厳命だ。市民に銃を向ける訳にはいかない。

だがそれは逆効果だった。兵士が動かないと見るや、市民は勢いを増し一気に前に出た。あつという間に何人かが司祭を取り囲み、その他の人間が士官に向かった。

司祭にいち早く駆け寄ったのは、黒髪の少女だった。

輝く澄んだ瞳を潤ませて、少女が司祭の耳元にひざまずく。

左右で束ねられた艶やかな黒髪が、一度両脇にフワツと広がってから肩に向けて落ちていた。しなやかな曲線を描くその黒髪が、優雅に一つ大きく揺れた。

「司祭様！」

「君は……　あの時の……　ぐ……　私は大丈夫です……　皆さんは……」

司祭は苦しげに、そして気丈にも口を開いた。脇腹から一際激しく鮮血が吹き出した。

「そんな……　まずは司祭様です　」

少女はそう言うと、司祭の耳元へとその可憐な口を寄せる。そして司祭の脇で、治療の魔法を唱え始めた者にすら聞こえない程小さな声で、

「この革命に、尊い犠牲を捧げるのはね……」

悪意に歪んだ笑みを浮かべながら、そう呟いた。

二、血の日曜日5

「キヤーツ！」

一際大きい悲鳴がした。雪崩れ込もうとしていた市民の足が一瞬止まる。見れば司祭に真っ先に駆け寄った黒髪の少女が、真っ青な顔で立ち上がっていた。そしてその足下では

「……い……論者……過激……は……か……」

ガポン司祭がそう呟いて、がっくりと首を垂れた。

「おのれ！」

「司祭様が！」

市民が色めき立つ。一度は止めた足を怒りで踏み鳴らし、兵士に向かつて駆け出す。司祭が掲げさせた旗すら、放り出して向かつていく。

「止まれ！」

土官が叫ぶ。だが市民の耳には届かない。投石に対して発砲で応えたのだ。市民は怒りに身を震わせ、土官の言葉に耳を貸さずいきり立つ。

「クソッ……」

ガポン司祭との交渉にあたっていた土官が、市民の波に飲み込まれた。

「助け出せ！」

やむを得ず別の土官が命令を下す。発砲は未だ許可していない。厳命を守りつつ、この場を抑えるつもりだった。だが二度目の発砲が全てを台無しにした。

パンッ！

「キヤーツ！」

女性の悲鳴とともに、人波が割れる。その割れた人波から倒れて出てきたのは、交渉にあたっていた土官だった。

額に穴が空いている。即死なのは遠目にもすぐに兵士達に知れた。

市民の一人が短銃を構えて震えていた。銃口から立ち昇る煙を見るまでもない。士官は市民に撃たれたのだ。

「おのれ！」

そう毒づいた別の士官は自分が発砲を許可したのかどうか、後になっても思い出せなかった。

だがもう事実が変わらない。市民への発砲が始まった。銃声が銃声を呼び、悲鳴が悲鳴を呼んだ。そして銃声と悲鳴が互いを呼び合った。

冬の宮前は、その寛容さとは裏腹に、阿鼻叫喚の地獄と化した。

ノエルは遠くで銃声を聞いた。

歩く度に人が増えていくデモ行進。自分でもよく分からない高揚感を覚えながら、皆について歩いた。先頭は随分と先だ。このまま歩いて終わりなのか、最後に何かあるのかノエルにはそれすら分からない。

だがノエルは正しいことをしているのだと思った。家に帰ったら母とポチョムにこの様子を話してあげようと思った。自分には関係のないことだと思わずに、デモに加わって力になった。自分は皆と正しいことをしている。二人とも褒めてくれると思った。

しばらくすると、デモの行進が止まった。大人の背中で前がよく見えない。つま先立ちで背伸びをすると、冬の宮の屋根がかるうじて見えた。

どうせここまできたのなら、冬の宮を間近で見たい。もしかしたら魔法皇帝を一目見ることができるかもしれない。そう思うとノエルは、少しだけ緊張感が解けた。

デモと言っても歩いているだけ。聖教会の守護者たる魔法皇帝に、これも聖教会の司祭が会いにいく。それはごく自然なことだ。

もしかしたら魔法皇帝の声でも聞こえないかと、ノエルは背筋を伸ばした。どうせなら少しでも多く、土産話を持って帰ってあ

げたい。そうも思った。

銃声が鳴り響いたのはその時だった。

「何？」

その銃声に驚いて辺りを見回したのは、ノエルだけではなかった。皆がお互いの顔を見て、不安にざわめいている。

「何？ 何ですか？」

「さあ……」

銃声なのは誰の耳にも明らかだったが、その大人は答えをはぐらかした。

遠くから聞こえた、小さく乾いた破裂音。銃声

いや銃声などとは俄には、信じられない。信じたくない。聞き間違いだと思いたかった。

「おいっ……」

もう一つ銃声が聞こえた。同じく小さい破裂音。誰もが隣の者と顔を見合わす。昨日のストでも軍隊は出動していた。今日も冬の宮の前には、多くの兵士が警備にあたっているという。

デモの民衆がざわめく。良くない想像に心を乱されながらも、それでもそれを信じようとせず、その場でお互いの顔色を窺った。

「は……だ……」

それは遠くからの小さな声だった。ノエルは耳を澄ます。

「はっ……ぼ……だ……」

それは少し遠くからの小さく、幾人かの声だった。ノエルは耳に意識を集中する。

「発砲……だ……」

それはもう耳をすまさなくても聞こえる、悲鳴まじりの声だった。多くの者が、より多くの者に伝える為に声を張り上げる。

「発砲だ！」

「逃げろ！ 奴ら撃ってきた！」

「戻れ！ 下がれ！」

怒号が飛び交う。それに混じって聞こえてくるのは、間違いなく

銃声だ。市民が雪崩を打って動き出す。悲鳴を上げながら、他の者を押し退けながら、人の流れが渦と化す。

「キヤーツ！」

力のない者が押し倒された。逃げ惑う民衆の中で、押され、押し退けられ、足をかけられ、倒れていく。銃声はますます大きくなる。「大丈夫ですか？」

自分の横で転んだ女性に、ノエルがとつさに手を差し出す。その手すら押し退けて、周りの民衆は逃げ惑う。また銃声がした。自分を押し退けて去っていく大人を、ノエルは睨みつける。だがすぐに人に紛れてその背中は見えなくなった。

銃声と悲鳴がした。

ノエルは思わず首をすくめる。女性は足をくじいたのか、起き上がろうとしない。腰を地面に落とし、足首を手で押さえている。ノエルは民衆に押されて、女性から離される。

そこかしこで悲鳴が上がる。自分も逃げなくてはならない。女性からは離されていく。女性は自分が手を貸さなくても、他の大人が何とかしてくれる。ノエルは一瞬そう思ってしまう。

一際大きい銃声がした。

ノエルは思わず目をつむる。そして更に悲鳴。ノエルは恐る恐る目を開けた。女性の姿は小さくなっている。ノエルの体は更に押し流されていた。すぐに人波に紛れて女性を見失う。

だからもう他の人に任せていい。銃声。自分のせいではない。銃声。ノエルはそう思おうとする。悲鳴。だが体は前に出ようとする。怒号。人の波を押し退けようとする。罵倒。一人流れに逆らうノエルに、ぶつかった大人が罵声を浴びせる。

銃声。銃声。銃声。連続して聞こえる発砲音は、確実に大きくなっている。近づいてくる。

悲鳴。怒号。悲鳴。ノエルは歯を食いしばって前に進んだ。怒号。罵倒。悲鳴。人の流れに逆らうのは、思った以上に難しかった。そして聞こえてくる悲鳴。心が怯みそうになる。それでもノエルは前

に進む。更なる銃声がノエルを脅かす。

だが

「大丈夫ですか？」

ノエルはまだ地面に倒れたままの女性に、手を差し出した。人波をかき分け、やっと見つけた女性は、同じ場所でうずくまったままだった。

「あなたは……」

「大丈夫ですよ」

ノエルは自分にできる精一杯の笑顔を浮かべた。母が自分に心配させまいとする時の笑顔だ。

収穫が上手くいかない時にする笑顔。母のご飯だけが少ないと、内心思った時に見せてくれる笑顔。父が亡くなり自分も泣きたいだろうに、娘を心配させまいとした時に見せた笑顔だ。

「掴まって下さい」

ノエルが女性に肩を貸す。その女性のもう一方の肩を、見知らぬ男性が慌てて掴んだ。

「お嬢ちゃん達！　大丈夫か？」

「ハイッ！」

ノエルはその男性に、力一杯返事をする。同時に呪文を詠唱した。

「痛みが……　痛みが退いていくわ……」

「お嬢ちゃん。魔法が使えるんだね？」

「はい」

三人が歩き出す。女性は恐る恐る足に力を入れて、ノエルの肩から手を離れた。

「ありがとう……　歩けるわ……　ウソみたい」

「そうですか。でも、まだ一緒に」

「キヤーツ！」

遠くからの悲鳴に、ノエルが立ち止まる。女性にとられていた意識が一瞬で周囲に向かう。

「君？」

女性に肩を貸してくれた男性が、ノエルに振り返る。

だがノエルに合わせて、彼まで足を止める訳にはいかない。女性
は歩けるとはいえ、まだ足取りがおぼつかない。彼も一時でも早く
逃げなくてはならない。

「君！ どうした？ 逃げないと！」

ノエルは振り返る。男性の声が少し遠くなった。ノエルはあらた
めて周りを見回す。

「いいかい！ 逃げるんだ！ いいね！」

「……」

最後まで言葉をかけようとする男性の声を背に、ノエルは周りを見渡す。

悲鳴が聞こえる。逃げ惑う群衆の中に、痛みに耐える悲鳴が聞こえる。悲しみに耐える嗚咽が聞こえる。助けを求める声が聞こえる。

「今…… いくわ……」

ノエルは人の流れに逆らって、歩き出した。

二、血の日曜日6

首都の中心に近づくにつれて、混乱は拍車をかけていた。

逃げ惑う市民と、兵士に対抗しようとする市民。商店が焼き討ちされている。馬車や屋台がひっくり返され、臨時のバリケードが幾つも作られていた。

迎え撃つつもりか、銃を持った市民もいる。軍の本体はまだまだ先のような。だが何人かの市民が氣勢を上げて、兵士を迎え撃とうとしている。

ノエルには見えなかったが、首都の中心はもう暴動と呼んで他ならない状況になっていた。

そして軍隊はその鎮圧に乗り出している。デモとその監視ではなく、暴動とその制圧に市民と軍の関係は変わってしまった。

ノエルは足を引きずる男性に出くわした。肩も押さえている。ノエルは迷わず呪文を唱える。

「これは……」

男性は目を見張った。一瞬で痛みが退いた。すれ違いざまに呪文を唱えた少女。その小さくなっていく後ろ姿を見送る。

ノエルは路肩で倒れ、歩けなくなっていた親子を見つける。

母親は足を撃たれたようだ。三つ程の子供がその側で泣きじゃくっている。母親が逃げる人に子供を託そうと、必死で手を伸ばした。一人の女性が子供を抱きかかえ、母親も立たせようと手を伸ばす。母親は首を横に振る。泣き叫ぶ子供を女性に押しつけて、二人だけは逃がそうと、自分はいいと必死に首を振る。

ノエルは全ての魔力を、その母親に向けた。

「足が……」

近づいてくる少女から聞こえる呪文の詠唱。見る間に痛みが退き、出血が治まっていく。

「あなたは……」

女性が呆然と呟く。ノエルが近づいて手を貸した。ノエルと女性に支えられながら、母親が立ち上がる。子供が泣きじゃくりながら、母親にしがみついた。

「いって下さい！」

ノエルが叫ぶ。力強い言葉だった。

その後もノエルは怪我人を見つけると、すぐに近寄っていった。そして瞬く間に怪我を治していく。その様子はすぐに幾人かの民衆の目に止まった。

「こつちも頼む！」

「任せて！」

むしろ向こうからかかり始めた声に、ノエルは脇目もくれず駆け寄っていく。ノエルは暴動で傷ついた人を、魔力で持ち上げた。誰も手を触れていないのに、怪我人が次々と持ち上がる。

「すごい……」

氣勢を上げていた大人達から、歓声が上がる。魔力に優れる人間は数多い。だが、少女の魔力はまるで別格に見えた。その力も、その発動のスピードも。

そして何よりその使い手の、優雅な仕草

多くの者が、思わず見とれてしまう。怪我人は、暴動の渦の中から、次々と助け出される。ノエルは舞うかのように可憐に腕をふるい、歌うかのように澄み切った声で呪文を唱える。そして怪我人の為に念を凝らす様は、まるで祈りを捧げる聖母のようだった。

怪我人は持ち上げられた端から、癒されていく。助けられた怪我人の表情は、体の傷とともに、心まで癒されているかのように穏やかだった。

「すごい……」

ノエルの周りの人ばかりが、同心円を描いて広がる。皆、一人の少女が起こす奇跡に目を見張る。何人かが思わず、祈りに手を組んだ。

「こつちだ！ こつちも頼む！」

「任せて！ 今いく！」

声が出したのは奥の方だ。行進に対する前面からの発砲。怪我人は奥に、先頭にいくほど多い。暴動の更に中心へ。助けを求める人の為に、ノエルは駆ける。

「こつちも…… こつちも…… 頼む……」

「今いくわ！」

ノエルは呼ばれるがままに、身を翻す。そしてノエルは己の力の全てを、必要なところに集中する。怪我人を見つける為の目。怪我人に魔力を向ける為の腕。怪我人を癒す為に詠唱する唇。怪我人に近寄る為に、力を込めて前に運ぶ足

「大丈夫よ！ 待ってて！」

ノエルは気がつかない。怪我人にしか、意識がいかない。自分が何処に向かっているのかに、気がつかない。

「今！ 今いくから！」

ノエルは奥へ奥へと、吸い込まれていく。怪我人の為に。一人でも多くの人を救う為に。奥へ奥へと…… 暴動の 虐殺の 更に、中心へ…… 人々の悲鳴の中へ…… 冬の宮へと続くネフスキー大通りを奥へ奥へといく……

「待ってて！ 今」

ノエルは立ち止まる。突きつけられた現実には立ち尽くす。

「ッ！ えっ？」

辿り着いたそこは、今まさに兵が市民に銃弾を浴びせかけている弾圧の最前線だった。

「ウソ……」

ノエルの目の前に据えられた銃口から、

「ッ！」

一発の銃弾が射ち出された。

二、血の日曜日7

「マリー殿。ノエル殿は？」

朝から姿の见えないノエルの姿を探して、ポチヨムは家の中で首を巡らせた。

「珍しく日曜礼拝にいくつて言つてましたけど…… ちよつと遅いかしら……」

マリーも不安げに、窓の外を覗く。娘の代わりに外に見えたのは、その友人の父親だ。

「バブーフさん！ あんたのところは無事か？」

風花の父 工藤ライカが息せき切りながら、ドアを開けて入ってきた。

「どうしました？ ライカ殿」

「首都でデモだ！ いや、暴動だ！ どうも兵隊が発砲して…… 怪我人も出てるらしい！」

「何ですと？」

ポチヨムは思わず、四肢に力を入れる。兵隊。発砲。怪我人。ポチヨムの記憶がうずく。

「大混乱らしい！ プーシュカ 大砲すら持ち出されそうな、暴動が起こつてゐるって！」

「そんな！ ノエル！」

「ノエルちゃん…… 首都にいるのか？ まずいぞ…… デモ隊も兵隊も大混乱だ。巻き込まれてないか……」

「ノエル！」

「ダメだ！ バブーフさん！ あんたまで巻き込まれる！」

慌てて外に飛び出そうとするマリーを、ライカが押し止めた。

「ライカ殿。マリー殿を頼む！」

ポチヨムがそんな二人を押し退けて外に出ようとする。

「あんたこそ、ダメだ。その……」

「ライカ殿！ その先は…… 心の中だけに……」

ライカの言い淀んだ先を、ポチヨムが察する。ポチヨムのような魔法のマスコット猛獣が、このような郊外に身を寄せている。身を隠している。どう考えても訳ありだ。

ライカは察して、黙っていてくれている。知らなかった。事情は分からなかった。いざとなれば、そういうことにしなくてはならない。

「ポチヨムさん……」

マリーがポチヨムの背中に、声にならない声をかける。娘の安否と、ポチヨムの安全。いや、娘の命とポチヨムの命。秤にかけていいものか、マリーには分からない。

「マリー殿……」

ポチヨムは後ろを振り向いた。マリーに甘えるように、首をこすりつける。自分の匂いをマリーにすりつけ、鼻が弱っている分大きく息を吸ってマリーの匂いを心に刻む。

「ワシなら大丈夫…… 必ずやノエル殿を連れて帰ってきますから……」

ポチヨムは優しく微笑み、マリーの姿を脳裏に焼きつけると家を飛び出した。

ノエルは自分の身に何が起こったのか、すぐには分からなかった。熱い。とにかく熱い。右足が焼けるように熱い。そして、熱さの後、やつと痛みがやってきた。

「キヤーッ！」

ノエルは自分の足を押さえて、街道の石畳の上に倒れ込む。血が吹き出した。すぐに止まるような出血には見えない。貫通した弾丸は、太ももの前と後ろに、穴を空けていた。

「ウ…… ウワァッ！」

ノエルを撃った兵士が、叫び声を上げる。尚もノエルに銃口を向

けていた。銃口が震えている。その兵士の怯えそのもののように、鉄の塊が震えていた。

「う…… 撃たないで……」

「う…… 動くな……」

兵士は怯えている。威嚇の為、更に銃口を前に出す。

「イヤッ！」

「ヒッ！ うぐ…… くなっ！」

兵士が自分の中の恐怖に負けて、引き金を引いた。

「キヤーツ！」

周りの市民が潮を引くように逃げ出す。

「ッ！」

ノエルが声にならない悲鳴を上げる。左足のスネを打ち抜かれた。ウワッ！ ワワッ！ ファッ！ ワーッ！」

兵士が叫ぶ度に、銃口が火を噴く。四発のうち、二発がノエルに命中した。一発がノエルの左足太もにめり込む。今度は貫通しなかった。もう一発は、左肩を打ち抜いた。

「く……」

ノエルは全身の痛みに、一瞬意識が遠のく。自分を撃った兵士が、弾切れにもかかわらず、更に引き金を引いているのが音で分かる。

周りは似たような状況だ。

逃げ惑う市民。自身も恐怖に逃げ出しそうになりながら、市民に銃を向ける兵士。

人々を支配していたのは、恐怖だった。

銃を持った兵士に対する恐怖。銃持った自分達より数の多い市民に対する恐怖。殺さないと相手に殺される恐怖。逃げ惑う人々に押し潰される恐怖。上官の命令に従わないと、自分の身が危ない恐怖。殺さなければ、殺されるという恐怖。次は自分だという恐怖。力による恐怖。恐怖そのものを恐れる恐怖。

そしてこの恐怖がいつ終わるのか、誰にも分からない恐怖に、市民は更に恐怖した。

二、血の日曜日 8

ポチヨムは駆けた。町を駆け抜けた。人々の驚く顔など構っては
いられない。町を縦断し、もう一度街道に出れば、後は真っ直ぐ首
都だ。

「これは……」

その首都サントペルブルクからは、嫌な匂いが漂ってくる。
不吉な匂いだ。人間並みに落ちてしまったポチヨムの鼻でも分かる。
まず鼻につくのは煙の匂い。多くはものが焼ける匂いだ、その
中に混じった火薬の焼ける匂いが、一際ポチヨムの心をも焦がそう
とする。

そして少し遅れて肉の焼ける匂いがする。熱い鉄に焼かれた肉と
血の匂いだ。

「何ということだ……」

肉と血の焼ける匂い。その匂いとともに、悲鳴を上げる人々の顔
が浮かぶようだ。自身の反乱の際に、散々と嗅いだ匂いだ。

間に合ってくれ

そう願いながら、ポチヨムは駆ける。街道を駆ける。四肢の限り、
魔力の限り駆ける。

首都が僅かに視界に映った。駆ける視界で揺れる首都は、そのま
ま激動に揺らぐこの国そのものにポチヨムには見えた。

乾いた銃声が聞こえた。人の命を奪っているとは思えない程、あ
っけなく小さな音だ。反乱の際に銃撃で死んでいった仲間の姿が、
ポチヨムの脳裏に思い浮かぶ。

「ノエル殿！」

ポチヨムは力の限り四肢に魔力を送り、街道を駆け抜けていった。

ノエルを撃った兵士は、恐怖からか、奇声を発しながら人々の向

こうに去っていった。

「どうして……」

ノエルは自分の状況が信じられない。撃たれて血を流している自分。信じられない。

「く……」

何人かの民衆が、ノエルにつまずき、あるいは踏みつけながら逃げ惑う。

ノエルもこの場を離れようとした。だが足に力が入らない。冷たい石畳の上を手で這う。意識が遠退きそうになる。

「お母さん……」

誰かがノエルにぶつかった。ノエルは力なく地面に突っ伏す。

「お…… 父さん……」

ノエルは足を踏まれる。形容しがたい痛みが走る。

「ッ！」

思わず足を触ろうとした。だが触っていいのかどうかも分からない。あつという間に赤く腫れあがる。

「……ポチヨム…… くん……」

ノエルは歯を食いしばり、遠退く意識をかるうじて引き止めた。

ポチヨムは首都に入っても、力を緩めず駆け抜けた。

「ノエル殿！」

ポチヨムは自分の鼻に、魔力を集中する。失われた嗅覚を魔力で呼び戻す。

血と鉄の焼ける匂い。そして火薬の匂いがポチヨムの嗅覚を、そして脳を直撃した。

ただの匂いだというのに、ハンマーで殴られたかのような衝撃だ。ノエルのことがなければ、すぐにでも魔力を解除するだろう。

強烈な負の匂いが、辺りに充満していた。このまま魔力を鼻に集中しては、最後には鼻がいかれてしまう。ポチヨムはそのこと

を本能で悟る。

それでも魔力は途切れさせない。ノエルを見つける為なら、今のポチヨムなら己の心臓だって差し出すだろう。

「虎だ！」

突然のアムールタイガーの乱入に、市民が混乱する。

ただでさえ逃げ惑い、押し退け合っていた群衆だ。今きた道に戻ろうとする者。脇にそれようとする者。仲間とはぐれて首を方々に巡らし、立ち止まる者。前の状況が分からず、後ろから押す者。倒れてしまい、皆に踏みつけられる者。地に伏せ、そのまま動かない者。

元々の混乱に、ポチヨムの出現が一部で拍車をかけた。

だがポチヨムは構ってられない。この混乱の中にノエルがいるのだとすれば、一刻も早く助け出さなくてはならない。

「こつちには兵士がいるんだ！」

群衆の誰かが叫ぶ。

「怪我人が！ 怪我人がいる…… 通してくれ！」

「撃つてきやがった…… あいつら…… 俺達をなんだと……」

「逃げる！ 本気だ！ 兵士の奴ら本気で俺達を」

最後の男性の声は、銃声とともにそこで途切れた。

「ノエル殿！」

ポチヨムが叫ぶ。ノエルの匂いが微かにする。だが、ここを通つたであろう その程度の僅かな残り香だ。

「どけ！ どいてくれ！」

ポチヨムは更に奥に進もうとした。だが群衆は発砲から逃れる為に、こちらに死にもぐるいで駆けてくる。

「クソ……」

ポチヨムは思わず爪を地面に立てる。この群衆を、爪と牙でかき分けて進みたい。弾き飛ばしてやりたい。我知らずそう思ってしまう。

ポチヨムが本気を出せば、人間は紙切れのように吹き飛んでいく

だろう。

「ダメだ……」

ポチヨムは目をつむって首を振る。その考えを意識して振り払う。ノエルの笑顔が脳裏に浮かんた。ノエルはそんなことを望みはしない。ポチヨムにも分かっている。

ポチヨムは一步前に踏み出した。やはり群衆に押され、思うように進まない。たった一步すらもどかしい。

「グオオオオツ！」

ポチヨムは吠えた。力の限り吠えた。自分のふがいなさに吠えた。太い四肢も、強靱な顎も役に立たない。巨軀も、しなやかな筋肉も飾り物のようだ。魔力も魔法も、何の為に身につけているのか分からない。その情けなさに、ポチヨムは吠えた。

だがその咆哮が、僅かに群衆を左右に分けた。ポチヨムの前の人波が微かに開く。

「ガァーッ！」

ポチヨムは憤りのままに、咆哮を上げた。その僅かな隙間に突撃する。人垣が更に割れる。

「ノエル殿…… 今、いく！」

ポチヨムは人垣を己の咆哮でかき分けながら、かろうじてノエルの匂いのする方へと急いだ。

二、血の日曜日9

白い軍服の胸が大きく上下した。胸に飾られた勲章が、その声に合わせて波打つように揺れる。

「バカ者！」

魔法皇帝 ニコライ二世 は叱責する。冬の宮の謁見の間で、大臣から報告を受けた。デモは暴徒と化し、兵はその鎮圧に乗り出したと言う。

「何ということか……」

そしてそのまま、齒を食いしばる。奥歯がギリツと鳴る。砕けたかと思う程の音だった。

「……それは……」

要領を得ない大臣の報告。それ以前に聞こえてくる銃声と怒号。何より市民の悲鳴。どんな惨劇が行われているか、想像するまでもない。

「厳命と申したはずだ！」

「は……」

魔法皇帝の激昂に、大臣はただただ縮こまっている。まるで役に立たない。

「ラ」

魔法皇帝は思わず、皇帝直属の僧侶の名を呼びかける。僧侶はいなかった。彼は今、皇子の病氣治療で席を外している。そんな簡単なことも失念していた。

「もういい！ 直接指揮を執る！」

他の者に任せてはおけない。苛立つ心そのままに、魔法皇帝は席を立った。

ポチヨムは人々が逃げ惑うネフスキー大通りを、奥へ奥へと駆け

抜ける。血の匂いと、肉の焼ける匂いが一際鼻につく。だが求めていた匂いが最もする通りだ。

ノエルはここにいる。ポチヨムはそう確信する。

「ノエル殿！」

ポチヨムは後ろ足で立ち上がり、周囲を見回す。自分程巨大な獣がいて、目立たない訳がない。ポチヨムの声を聞いたノエルが、これで自分を見つけて駆け寄ってくる。そう考えた。

「ノエル殿！」

ノエルは現れない。人々が自分を遠巻きに避けて、逃げ惑う。ノエルはこの人波に吞まれて、上手く動けないのかも知れない。自分から見つけなくては。ポチヨムはそう思った。

「ノエル殿！」

ポチヨムは首を巡らす。匂いは強烈だ。ノエルはここにいる。だがノエルの姿が見えない。こちらを呼ぶ声もしない。ノエルは優しい娘だ。誰か怪我人の手当でもしていて、こちらに振り向けないのかもしれない。ポチヨムはそう信じた。

「ノエル殿……」

駆け寄りもせず、返事もなく、姿すら見せない。

ポチヨムは低く唸る。あつてはならない考えにとらわれる。ポチヨムは考えまいと首を振る。

そしてその時、視界の端に何かが映った。

逃げ惑う、人々の足の間だ。

ポチヨムは怒りのあまり歯ぎしりをする。

あんな優しい娘が、血溜まりの中で倒れていていいはずがない。逃げ惑う人々に、踏まれていていいはずがない。曲がるはずのない方向に、足を曲げていていいはずがない。

「グアアアアッ！」

ポチヨムは人波を弾き飛ばしながら、ノエルに向かって突進した。

ポチヨムは一際大きく跳躍すると、ノエルの上に覆いかぶさった。
「グアアアアアアアアアアアアッ！」

渾身の力で、声の限り周囲を威嚇する。誰も近づけない。もう誰にも傷つけさせない。誰の目にも触れさせない。沸き上がる怒りのままに、ポチヨムは咆哮した。

「……ポチヨムくん……」

ノエルが小さく呟く。その弱々しい声が、ポチヨムの心を引き裂く。

「ごめんね……ポチヨム……くん……」

「話さなくていい……」

逃げ惑う人々から守る為、ポチヨムが己の四肢の下でノエルをかばう。遠くに兵士の姿が見える。市民に発砲しながら、こちらに近づいてくる。

「……ごめ……」

「話さなくていい！」

ポチヨムは自分の魔力の全てを、ノエルの傷に向けた。まずは血だ。出血を止めなくてはならない。痛みを和らげてあげたい。安全なところに運んでやりたい。励まして力づけてやりたい。そんな当たり前の願いすら、今のノエルの為には後回しにせざるを得ない。

ノエルの顔は蒼白だ。血が足りていない。これ以上の出血はさせられない。

兵士が近づいてくる。人々が逃げ惑う。ポチヨムが唸る。ノエルには指一本触れさせない。睨みを利かす。

だが狂気と恐怖に取り憑かれた人々は、ポチヨムの気迫にすら負けずにこちらに流れてくる。

「ガアアアアアッ！」

ポチヨムが吠える。怒り任せて吠える。牙をふるいたい。爪を食らわせない。魔力で蹴散らしたい。ノエルの安全の為なら、他の誰

をも犠牲にしても構わない。そう思ってしまう。

だが

「……」

ノエルがポチヨムの足を掴む。その温かくも冷たい手。

ポチヨムが耐えている。それがノエルには分かる。だから力づけようと、力の入らない手でポチヨムに触れてくる。その思いが、ポチヨムの足を通じて伝わってくる。

「ノエル殿……」

出血は止まった。ノエルはそれでも歯を食いしばっている。痛みが退かないのだろう。ノエルは立ち上がろうとしない。できないのだろう。だがいつまでもここには危険だ。

ポチヨムは思い切って、ノエルの襟足をくわえた。

「ッ！」

ノエルが声にならない悲鳴を上げる。

構わずポチヨムは地面を蹴った。衝突の最前線を逃げ去り、今きた道を引き返す。乾き切っていないノエルの血が、点々と地面に滴り落ちた。

二、血の日曜日10

逃げ惑う人々を避け、ポチヨムはノエルと人気のない民家に逃げ込んだ。傷に響かないようにと、ポチヨムはゆつくりとノエルを壁にもたれかけさせる。

「……ポ……」

「話さなくていい…… これを……」

ポチヨムが魔力を込めて念じる。ガラスの小ビンが現れた。床に直に座るノエルの前に、ゆつくりと漂ってくる。

「……」

「超タウリン。一口だけですぞ……」

いつぞやのかすり傷とは、怪我の具合も深刻さも何もかもが違う。飲んだ分だけ治るのなら、目一杯飲ませてやりたい。だが超タウリンは劇薬だ。弱った体には、毒そのものだ。

ポチヨムはノエルに一口だけ舐めさせ、徐々に回復させるしかないと考えた。

「……」

ノエルは見るからに痛々しい腕でビンを掴む。

その血だらけの腕から、思わずポチヨムは目を背けてしまう。

「グ……」

一口舐めただけでノエルはやはりむせてしまう。そしてその衝撃にビンを落としてしまった。

「あ……」

中身をこぼしながら、超タウリンのビンが転がっていく。ノエルは思わず手を伸ばしたが、やはり痛みに耐えられないようだ。腕を伸ばすことすらできなかった。

「構わない。安静に……」

ポチヨムは転がっていくビンを見送って、ノエルに話しかける。

この様子では、二口目はかなり危険だろう。超タウリンによる回

復はあきらめ、ノエルの自然な回復を待つしかない。

だがそれではもどかしい。ポチヨムは思わずノエルの傷を舐め出した。

「ごめんね……ポチヨムくん……」

「いい……話さなくて……」

「……ごめんね……」

「いいんだ……」

「ごめ……」

「いいんだ！」

「……」

逃げ込んだ先の無人の民家。壁に背中を預けるノエル。

ノエルは痛み of せい、まるで体を動かさそうとしない。

外からはまだ、銃声と喚声が聞こえてくる。だがここだけは、偽りの静寂が支配していた。ポチヨムには別世界のように思えた。しかし長くはもたないだろう。

ポチヨムはその大きな舌で、ノエルの傷を舐め続ける。ポチヨムが静かにノエルの傷口を舐める。黙々と。ただ黙々と。

「……」

ポチヨムは一心にノエルの傷を舐める。もちろん魔力を込めている。魔力による回復に比べれば、傷口を舐めることなどたいした効果はないのかもしれない。だがノエルは、身も、心も傷ついている。少しでも多く、触れてやらずにはいられない。

外の銃声が大きくなる。悲鳴を伴っていた。ここももう、安全ではないのかもしれない。兵士は民家の中にも踏み込んでくるだろう。この偽りの静寂も、もうすぐ終わりを告げるだろう。

「……」

それでも安心したのか、ノエルがゆっくりと目をつむった。

「ノエル殿……」

ポチヨムは舌を休め、その顔に見入る。ノエルはそのまま、眠りにつきそうだった。外の銃声はますます大きくなる。ブーツの足音も聞こえる。兵士は近くまできている。

「……」

ノエルは眠ったようだ。張っていた気が、一気に緩んだのだろう。ポチヨムはノエルの寝顔に見入る。そのまだあどけなさを残した顔を、脳裏に刻みつけようとする。そして

「……」

覚悟を決めた。ポチヨムはその身を翻す。

「ダメよ……」

寝ているうちと思ったが、ノエルはすぐに目を覚ましたようだ。或はポチヨムが身を翻したその物音で、目を覚ましたのかもしれない。もしくはその悪い予感で。

「ポチヨムくん…… ダメ…… いっちゃダメ……」

ノエルはポチヨムを引き止めようとしてか、その体を掴んだ。だが意識がもうろうとする体では、思うように力が入らないのだろう。かろうじて、ポチヨムの脇腹の体毛を掴んでいた。腕はおろか、体中に力が入らないようだ。ポチヨムに引かれたその体は前に屈み、力なく頭を垂れてしまう。

「ノエル殿……」

「ダメよ…… 死ににくつもり……」

ノエルは顔を上げた。今ここで手を離しては、ポチヨムはいつてしまう。自分に注意を引きつけ、この場から兵士を遠ざける為、困となりについてしまう。

「…… そうそう、欲しがっていたですな…… 新しい鎌と鎚……」

ポチヨムの体が優しく光った。その身から真新しい鎌と、鎚が現れる。ノエルが欲しがっていた鎌と鎚。ポチヨムが特別に魔力を込めて産み出した、魔法のアイテムだ。

鎌は短い柄に、三日月を思わせる大きく湾曲した刃がついている。手元から半円を描くその湾曲した刃。その先端は、柄の延長線上を

飛び出す形で鋭く伸びている。

そう、先端にいくほど細く、鋭利になるその刀身は、まるで虎がふるう爪を思い起こさせた。

鎚は木製の長い柄に、黒光りする鍛鉄の頭部がついている。大振りだが片手に余る程ではなく、用途によって使い分ければ、片手でも両手でも威力を発揮するだろう。

そして無骨だが重厚なその流線形の頭部は、あたかも虎が獲物に剥く牙で作ったかのようなのだ。

「これがあれば草刈りも、土木作業も楽ですぞ」

微笑んだポチヨムの口中から、白い歯の光がこぼれて見えた。一際大きな上顎の右の牙が一本、その口からなくなっている。外からは見えないが、右前足の爪も一つなくなっていた。

「何と言っても、魔法のマスコット猛獣の力を持つ、鎌と鎚ですかな」

何時の日かくる別れの日。その時の為の饞別のつもりで考えていた。たとえ自分がいなくなっても、自分の分身で少しでも楽に農業をして欲しい。

その思いから考えていた、魔法の鎌と、魔法の鎚だ。

あやうく渡し損ねるところだったが、ノエルに一度引き止められたお陰で思い出した。

「……何言ってるの……」

ノエルは別れのしるしに、この鎌と鎚をポチヨムが差し出そうとしていることに気づいた。饞別。いや違う。これでは饞別どころではない。

形見と思って下され

ポチヨムは声に出さずにそう告げると、顔をノエルの頬に近づけた。そのまま大きく鼻で息を吸い、ノエルの匂いを脳裏に刻み込む。鼻の調子に関係なく、吸える限り大きく息を吸う。

ノエルの周りの空気とともに、その思い出を胸に納める。息を吸い終わると、一呼吸置いて頬をノエルに押しつける。自分の温もり

と匂いを伝え、感謝と信愛の情をノエルに伝えた。

「楽しかったですぞ！」

そう告げるとポチヨムは、前に向き直る。もう未練はない。ノエルの顔から、ポチヨムが離れる。ゆっくりと歩き出す。それだけで、ノエルの指は引きはがされた。

「いやっ…… ポチヨムくん！」

必死に手を伸ばすノエルの叫びもむなしく、ポチヨムは振り向きもせずドアに向かう。振り向いてしまつては、ノエルにまだ引き止める希望を持たせてしまふ。そんな訳にはいかない。

自らも振り向きたい思いを振り切つて、ポチヨムはドアをくぐる。

「うっ…… うっ…… うわぁ……」

ノエルは手を伸ばす。だが足が動かない。前のめりに倒れてしまふ。

ノエルは慌てて顔を上げた。

だが

「ポチヨムくん……」

ポチヨムの背中にもう、ドアの向こうに消えていた。

二、血の日曜日11

ポチヨムは民家を飛び出した。一息にその場を離れ、通りを駆け出す。

「兵よ！ 聞け！」

十分距離をとったと見たポチヨムが、手短な小屋の屋根に登って吠える。

「先に港で起きた反乱…… その首謀者を捜してはいなかったか？」
「何？」

兵士が顔を上げる。ポチヨムが威嚇するかのように、更に低く唸った。

「貴様？ 手配書の！」

前年に起こった黒海での反乱騒ぎ。戦艦を奪った上での、国家への反逆だった。

その首謀者は、一匹の魔獣。

今日の前にいるのは、手配書通りのアムールタイガー。人語を話す獣。兵士を挑発するかのようなその態度。間違いようがない。

反逆者の長にして元貴族 追われる身の、魔法のマスコット猛獣だ。

「降りてこい！ 貴様も一度は公に列せられし貴族！ 悪あがきは見苦しいと思え！」

土官がポチヨムの迫力に、負けじと吠えた。

「ほう…… そのか細い首筋で、よくそれだけの声量が出るものだな……」

「何を……」

土官は思わず首筋に冷たいものを感じる。人間として、か細いと言われるような首をはしていない。むしろ地方から集められた農民出の兵士と違い、職業軍人として日頃から鍛錬を積んでいる。そこらの人間と比べても、一回りか二回りは太い喉周りのはずだ。

「一噛みで終わるその首…… 生意気を言つようなら、今すぐぐり落としてくれよう！」

ポチヨムはことさら時代がかった物言いで、残った左の牙を見せつけた。

続々と兵士がポチヨムの足下に集まってくる。多くの者が及び腰だ。

虎というだけでも恐怖。シベリアの虎なら、尚恐怖だ。

本能的な恐怖に兵は怖気づく。ましてや魔獣だ。畏怖すら感じる。そしてその虎が放つ明確な敵意。

一噛みで終わる首を何本並べても、この猛獣の放つ野生の氣に、対抗することなどできそうにない。人間など、野生と魔法の前では圧倒的な弱者だと思い知らされた。

ポチヨムは集まってきた兵士を、一人ずつ睨みつける。自分をとさら印象づけた。

かなわないと一度印象づけてやり、頃合いを見て逃げ出すつもりだった。千載一遇の好機と思わせて、浮き足立たせ、なるべく自分に引きつける。兵士をこの場から、遠ざける。

ノエルが回復し、逃げる時間を稼ぐ為だ。

ポチヨムは大きく息を吸い込むと、

「いくぞ！」

自分に言い聞かせるように叫び、屋根から兵士達に飛びかかった。

「う…… いや……」

ノエルは動かない足で民家の床を這った。全身に激痛が走る。

「ッ！」

だが構ってはいられない。自分の浅はかな行いで、大事な人を失おうとしている。

「動いて…… お願い…… 動いてよ……」

ノエルは肘が擦り剥けて、血塗れになりながら前に進む。だがま

るで進んでいない。

「どうして…… どうしてよ……」

ノエルは後悔に涙する。それでも前に進もうとする。

「助けて……」

ノエルは願う。

「聖母様……」

ノエルは祈る。

「お願い……」

だがノエルの願いは届かない。

「聖母…… 様……」

ノエルの祈りは通じない。

「誰か……」

ノエルの思いは

「ッ？」

ふとノエルの肘に、何かかが当たる。

「何……」

ビンだった。

これは

ノエルの目がそのビンに釘づけになる。それは先程一口舐めて、咳き込んだ劇薬のビンだ。

一口だけだったが劇的に回復した。だが二口、三口と口にするには、あまりに劇薬に思えた。ポチヨムも一口だけしか、舐めるなど言った。

「ポチヨムくん……」

ノエルはポチヨムが残してくれた、薬のビンを見つめる。蓋も閉めずに転がしたビンは、中身を空にして転がっている。

ノエルは痛む体で、ビンを拾い上げた。中身はなくなっていた。全てこぼしてしまっている。

ビン底に僅かに液体が残っていた。

ノエルはビンを逆さにして、その微かな中身を舌の上に落とす。

「ガハッ！」

やはり劇薬だった。一滴垂れてきただけだったが、むせ返ってしまふ。だがグンと、力が入った。見る見る体が回復するのが分かる。「もつと…… もつとあれば……」

もつとあれば、もつと回復すればポチヨムを追いかけることができる。ノエルはかすむ目で、その僅かな希望にすがろうとする。

ノエルは辺りを見回した。ポチヨムは一本しか出さなかった。それは見ていた。だが一片の奇跡を求めて、首を巡らせてしまふ。

あった

ノエルはぼやける視界で見つめる。超タウリンが染み込んだ、その泥だらけの

二、血の日曜日12

ポチヨムは兵士の注意を引きつけては、発砲を避けて通りを逃げ続けた。

「追え！」

士官が叫ぶ。元より四足歩行のポチヨムには、追いつけるはずもない。

それでも、ポチヨムは時折立ち止まっては振り返り、威嚇する振りをする。振り切つては意味がない。兵士が追いつくのを待つ為に、わざと時間を使う。

「貴様らにやられるワシではない！」

多くの兵士が市民への発砲を止め、ポチヨム追跡に加わった。ポチヨムの思惑通りだ。

次々と撃ち出される銃弾を、走りながらポチヨムが避ける。追走しながらの狙いが定かではない銃撃だが、時折ポチヨムの皮膚をかすめる。

「おのれ！」

士官の一人が、ポチヨムの前に立ち塞がった。左の掌を差し向けている。

「魔法か？」

ポチヨムが魔力を己の鼻先に展開する。瞬時遅れて紅蓮の炎が、ポチヨムに襲いかかった。

「障壁魔法？ さすがと言ったところか！ マスコット猛獣！」

士官は炎がポチヨムの魔法の障壁で防がれたと見るや、腰のサーベルに手をかけた。抜き放った勢いのまま、ポチヨムに斬りかかる。斬れぬよ！ そんな、なまくらでは！

ポチヨムの爪が、サーベルを弾く。左から右にふるった、左前足の爪だ。そのまま右前足を返す刀で士官にふるいかけて、その鼻先で止めた。

いつもなら伸び出るはずの爪が、一本なかったからだ。その違和感で出し損ね、そのまま攻撃を止めてしまう。

このまま勢いに任せて右前足をふるっていけば、士官の命を奪っていただろう。だがポチヨムはためらってしまった。

「ノエル殿……」

ノエルならそんなことは望みはしない。そう思ったからだ。

ノエルは立ち上がれない。腕は上半身すら、支えられない。這っていき、頬を地面に着けて舌を出し、顔を傾けた。

ノエルは泥だらけの 床を舐める。

超タウリンと混じり、泥と化した床のホコリを舐める。ジャリッという音がした。

床を削るように舐める。

舌が痛い。泥の味はひどく不味い。

そして劇薬とも言うべき、超タウリンがノエルを襲う。

「グエツ…… グ…… ゲボ……」

すぐに吐いてしまった。ノエルは激しく身を振る。

「ぐ……」

それでもノエルは、もう一度舌を出す。

己の反吐が混じってしまった、泥の床を舐める。

「ガアアア……」

やはり吐きそうだった。

それでも喉元まで迫り上がったものを、ノエルは押し戻す。

超タウリンが更に負担をかける。

「ゴキ……」

折れた骨が、無理矢理繋がった。

「ッ！」

その物理的な衝撃が痛い。

「……グアッ……」

しばらくして、やっと声が出る。折れた時以上の痛みだ。床を舐める。薬と涙と涎に塗れる床を舐める。

「ガガガガ……」

歯が鳴る。無自覚に鳴る。止まらない。

皮膚が無理に繋がろうとする。

何とも言えないかゆみが、皮膚の上を這い回る。

幾万ものイトミミズがうごめくような、この己の皮膚をかきむしりたい。

「グッ……」

歯を食いしばって、その欲求を耐える。

足りない血を送り出す、骨髓が焼けるように熱い。

全身の痛みを受けつける頭は、内側から割れるようだ。

「ッ！ッ！ッ！」

悲鳴はまたもや、声にならない。

かろうじて出せるのは、『ヒュウ』という乾いた音だけだ。

だが一番痛いのは

まぶたにポチヨムの背中が浮かぶ。

ポチヨムくん

ポチヨムにもらった鎌と鎚を、ノエルは力の限り握り締める。

ノエルは床に歯を立て、かじりついた。

戻ってきた力で、周囲の泥をかき集める。一気に口に押し入れた。

「ッ！」

超タウリンがノエルの中で爆ぜる。

ノエルは涙と泥だらけの顔と姿で

「ウワアアアアアアアアアアアッ！」

立ち上がった。

二、血の日曜日13

「こしゃくな！」

サーベルを弾かれた士官が、目の前を通り過ぎようとするポチヨムに、尚も左手を向ける。

「グッ……」

障壁の展開が間に合わなかったポチヨムは、左後ろ足を士官の炎にあぶられた。

「おおっ！」

「いけるぞ！」

初めてまともに当たった攻撃。その炎に兵士の間から歓声が上が
る。

勢いづく兵士達。

傷ついた足をかばいながら、駆けるポチヨム。思った以上のダメ
ージだ。力が入らない。

「まずいか……」

ポチヨムが顔を歪める。兵士の発砲。数発避け損ねた。肩に当た
った弾は、たいしたことはない。分厚い筋肉があるからだ。だが、
脇腹に入った一発は、

「グッ……」

ポチヨムの意識を一瞬遠ざける。

「まだだっ！」

ポチヨムが駆ける。兵士が追う。待ち構える。その数は増えるば
かりだ。発砲。肩に……脚に……腰に……弾が命中する。避
けたつもりの弾が、避けられない。

「まだだ！ まだやられはせん！」

ポチヨムが飛ぶ。力を入れる度に、四肢が悲鳴を上げる。着地す
る度に、臓腑にめり込んだ弾丸が暴れる。視界が狭くなる。

「まだやられる訳には……」

ポチヨムの両脇を、氷と炎が同時に襲った。魔法による攻撃だ。避けられない。右前足が焼かれ、左目の上を小型のブリザードが襲った。

「この程度！」

氷の魔法を放ち目の前に立ち塞がる兵士。その体を突き飛ばし、ポチヨムは駆ける。炎の魔法を使った兵士が、更に追い打ちをかける。

「ッ！」

後ろからの炎に、一瞬ポチヨムの全身が包まれる。もはや避けることすらままならない。真っ直ぐ走るだけで、精一杯だ。

もう少し…… 後少しだけ

ポチヨムは最後の力を振り絞って前に駆けた。ただひたすらに、ノエルの姿を心に浮かべて。

ノエルは歩き出す。だが自分の身に何が起きているのか、よく分らない。

ポチヨムがくれた鎌と鎚に導かれるように歩く。周りの景色が、飛ぶように流れる。ポチヨムの背中に乗った時よりも、周りの景色が早く流れる。その代わりに人々の動きはひどく遅い。

先程から何人かの兵士が、近づいてきては弾き飛ばされている。

あんなに緩慢な動きなら、当たり前だ。ノエルはそう思う。

実際魔法の鎌と鎚を少しふるうだけで、兵士達は弾き飛ばされた。力がみなぎっているのは、超タウリンのせいだろうか？ いくべきところが分かるのは、鎌と鎚のお陰だろうか？ では、この使命感は何処からくるのだろうか？

ノエルには分らない。

ノエルは民家の壁に、鎌と鎚をふるう。鎌で壁に傷を入れ、鎚で打ち碎いた。あっけなく壁が崩れる。ノエルは幾つかの壁を砕き、一直線に鎌と鎚が導く先へと向かう。

この向こうだ

ノエルには何故かそれが分かった。だが何故それが分かるのか、ノエルには分からない。

そして何故教わったことのない呪文が、脳裏に浮かぶのか分からない。

だがノエルは信じる。これは自分に与えられた使命なのだ。

「聖母様……」

ノエルは祈りの言葉とともに、そして魂のままに、心に浮かんだその呪文を唱えた。

「マ
」

二、血の日曜日14

ポチヨムは壁際に追い詰められた。兵士による発砲。ポチヨムは飛び上がって、銃弾を避ける。逃げた先も壁。周りを取り巻く兵士達。もはや突破できない。多くの兵を引きつけた。ノエルのいた場所から、少しでも多くの兵を遠ざけた。

「後は……」

ポチヨムが建物の脇道に逃げ込む。だがそこは袋小路。いき止まりだった。

ちようどいい…… 後は、人目のつかないところで死ぬだけだ。その思いを胸に、ポチヨムが振り返る。

『戦漢』の二つ名で呼ばれた獣が、己の命の使い道を悟る。

ポチヨムを追い詰めたと見た兵士達が、袋小路に雪崩れ込み、立て膝で銃を構えた。

「悪くない…… ですな……」

士官が発砲の号令をかけようと、手を振り上げた。

ポチヨムにはそれは、かなりゆっくりとした動きに見えた。

「ここで死ねば…… ノエル殿の目にはとまるまい……」

ノエルの顔を思い出す。マリーの顔を思い出す。三人で囲んだ夕食を思い出す。

「皆…… 今いく……」

反乱の仲間達を思い出す。彼らに比べれば自分は幸せ者だ。ノエルに出会ったあの日。本当ならあの日に死んでいた。いや反乱の時に死んでいてもおかしくはなかった。あの日から今日まで、魔法のマスコット猛獣には過ぎた幸せを味わった。親もいない自分が家族を持てたのだ。

兵士の後ろで、士官が手を挙げる。一斉発射の合図。後は号令とともに、振り下ろすだけ。士官が大きく口を開いた。

「充分だ……」

ポチヨムは覚悟を決め、目をつむった。
その時

「マルクス！ エンゲルス！ コミンテルン！」

その声に全員の動きが止まった。

ポチヨム。ポチヨムを追い詰めた兵士。遠巻きに逃げ惑う市民。
その場にいた全ての人間が、その透き通るような少女の声に耳を奪われた。

「世界同時に革命よ！」

十字の閃光が壁に走る。

兵士の横少し後ろの壁に、十字の傷が一瞬にして入った。レンガの壁にだ。十字の細い隙間が開き、そこから光が溢れ出る。
十字の光だ。

瞬時遅れて、その光とともにレンガが弾け飛んだ。

「魔法同志！ コミュっ娘！ コミュン！」

レンガが砕け散った壁から出てきたのは、軍服と軍帽の少女だった。いや軍服をモチーフにしたツーピースのドレスを身にまとった可憐な少女だった。

長い髪を編み上げ、その軍帽に押し込んでいた。

その左手には鎌。右手には鎚を持っている。

軍服は赤い。真っ赤に染め抜かれている。燃えるように赤い軍服は、まさに少女の勇気を表すかのようだ。そう、国旗にも染められている、勇気を象徴するかのような赤だった。

兵士が上半身だけで振り返る。そして誰もがその姿に声を奪われた。一言も発せられない。

「そうよ！ 私は護民官！」
グラキユース

ゆっくりと少女は瓦礫を乗り越えて、袋小路に進み出る。凜とした姿勢で、兵士達の後ろに立った。少女は鎌と鎚を左手に持ち替え、

己の腰にその手を当てる。

兵士達は上半身を後ろに捻ったまま、目を奪われる。目が少女に釘づけになったまま、全く瞳が動かせない。

「君のハートに」

少女は兵士達に、そしてその奥のポチヨムに、右手を差し出した。ポチヨムも含め十数人はいるのに、全員が自分に手を差し伸べられたのだと何故か思った。

「チエ」

『チエ』は異国の言葉で、『やあ』や『ねえ君』等の呼びかけの言葉だ。

少女はその呼びかけの言葉とともに、自分の右手を優雅に動かした。肘を上げ、掌を前に向けながら、顔の前まで持ってきた。掌を大きく広げ、小指の先までピンと綺麗に、すべての指が伸ばされている。顔の大部分が掌で隠されてしまった。だがかえって指の間からのぞく眼差しが、魅力的な光を放つ。

大きく開いた薬指と小指の間から、左の瞳で少女は前を見つめる。少女が自分だけを密かに見つめている。その仕草に誰もがそう信じた。『ねえ君』と、自分だけに呼びかけているのだと信じた。そして兵士達は思わず、少女に向き直る。

「ゲバ」

少女は一転して、腕を広げる。右手を後ろに伸ばし、掌を上に向けて、大きく胸を張った。

一度は隠した顔があらわになる。一度隠されたが故に、誰もがもう一度見たい。そう切望せざるを得ない美貌が、全ての視線を受け止める。

その少女の切れ長の瞳はつむられていた。武器を持つ兵士を前にして、無防備にして、無警戒。誰がきても構わない。誰でも受け入れる。誰であっても許しを与える。それがたとえ銃殺の為に、自分に銃口を向ける兵士であっても私は愛を与える。そう言っているかのようだ。

まるでイコンの中の聖母のような荘厳さと寛容さ

それでいて、革命に命を捧げた英雄のような気高さと誇り
それが、その万人に向けて開かれた胸から、溢れ出ている。

兵士達は我知らずに一歩、前に出る。心を奪われる。次々と聖母の名を口にし、無意識に銃口を下ろしてしまう。

「ラー！」

少女はその言葉とともに、一転して右手で敬礼した。少女の目が一気に見開かれる。

その最後の一言が

少女の全てを射抜く凜々しい視線が

兵士の、そしてポチヨムの心を貫いた。それは魂をも貫く声と眼差しだった。

二、血の日曜日15

「何だ……」

ポチヨムは呆然と呟く。今自分は何を見ているのだと、何が起きているのだと、目の前の現実を必死に把握しようとする。だが理解できない。ただただ驚愕に目を見開く。

最初に動いたのは、徴用されてきた貧農出の兵士だった。崩れるように膝を折る。一瞬にして耳も、声も、目も奪われた。そして今や、心を奪われ、魂すら奪われている。

若い兵士が次々と膝を着く。中にはまるで聖母に祈るかのように、手を合わせる者もいる。

「何をしている！」

隣の兵士が膝を着く鈍い音に、やっと我に返った士官が叫んだ。叫んで己を鼓舞しなければ、訓練を受けた士官すら、この場で戦闘を放棄してしまいそうなのかもしれない。

それ程の神々しさを、突然現れた少女は放っていた。

「立て！ 立て！ 立って、戦え！ 皇帝陛下の兵であるぞ！ 我らは！」

士官は自分の銃で、兵士達を叩きつけた。兵士達はお互いの顔を見ている。それはまるで、皇帝と目の前の少女とを、同列に比べているかのようだ。

「撃たんか！」

「う…… うわあっ！」

士官に背中を叩かれた兵士が一人、震えながら銃口を上げた。

「あぶないっ！」

ポチヨムが叫ぶ。

「ふふっ……」

コミユンと名乗った軍服の少女は、小さく微笑むと前に駆けつけた。あつと、兵士が思う間に、コミユンは銃口を上げた兵士の懐に入

り込んでいる。右手を下から上にふるった。コミュニケーションの鎚に弾かれて、兵士の銃が宙を舞う。

「おのれ！」

士官は振り絞るような声を上げ、銃口をコミュニケーションに向ける。力と勇気も振り絞っているかのようだ。力の入り過ぎた銃口が、コミュニケーションではなくその横の兵士の方を向いてしまっている。

「食らえ！」

士官は自分の標準が、全くぶれてしまっていることに気がつかない。目の前の少女の放つ畏怖の氣に負けてしまっている。一刻も早く、引き金を引いてしまふ。それしか考えられなくなっているようだ。プレッシャーに押しつぶされて、目までつぶってしまう。

弾丸が射ち出された。弾丸は、やはりコミュニケーションではなく兵士に向かって飛んだ。

「ダメよ！」

「ノッ」

ノエル殿と言いかけて、ポチヨムは慌てて口をつぐむ。本名を危うく叫びかけてしまったからだ。そして何より、少女が一瞬で、士官の銃口と兵士の間に立ち塞がっていたからだ。

コミュニケーションは左右の鎌と鎚をふるう。それだけで飛び出した弾丸を弾き飛ばした。

「な……」

あまりの光景に、ポチヨムは声を失う。それは周りを固めた兵も同じだった。

皆が息を呑む中、魔法同志コミット娘コミュニケーションこと フランソワ・ノエル・バブーフは、

「退きなさい！」

凜としてそう命じた。

その後、軍は総崩れした。

反乱の手配者を追い詰めていたはずの部隊が、袋小路から雪崩を打ったように走り出てくる。そのもつれるような足取りに、すぐにそれは敗走だと知れた。

事情の分からない他の部隊の士官が、逃げ出した兵士をつかまえて詰問する。兵士の目は全く焦点が合っていない。まともな返事すら返ってこない。ただ一言聞き取れたのは『聖母様が……』という、意味不明の言葉だけだった。

「クソッ！」

詰問していた士官は兵士を突き飛ばすと、注意深く銃口を袋小路の入り口に向けた。

壁の崩れる音と、銃声。確かに何かあったのは、聞こえてきた音だけでも分かった。銃声の前に、何か閃光のようなものが光ったことも、離れていた部隊からでも分かった。

だが武装した兵士達が、追い詰めた相手に腰を抜かさなばかりに逃げ出してくる。その理由が分からない。

「革命論者か？」

武装した兵士に、一定以上の脅威を与える存在など、それしか考えられない。だが仮に革命論者がいたとしても、その数は多くはないはず。兵士の脅威となるようなことはないはずだ。

「出てこい！」

その声に応えるように路地裏から現れたのは、手負いのアムールタイガーと一人の少女

赤く染められた軍服のようなドレスを着た年端もいかないその少女が、鋭い視線を周りに投げつける。そして脇に控えたその手負いの虎の傷は、瞬く間に塞がっていく。

「ノエル殿……」

ポチヨムは思わず呟く。魔法同志コミュっ娘コミュンとなったノエルは、敵を圧倒する力を見せつけた上に、ポチヨムの魔力と体力すら回復してみせた。二人はその魔力で、ポチヨムの傷を癒す。応急処置だが、ポチヨムは十分動けるまで回復した。

「しっ……今はコムンよ。手分けして兵を追い払いましょう」
コムンが鎌と鎚を構えた。

「しかし……」

「言っただしょ。今の私はコムンだって。今の私は魔法同志なの。
話は市民を逃がしてから」

コムンがポチョムに微笑む。これから戦いに臨むと言うのに、
柔らかな笑みだった。

「同志ポチョム！」

コムンは凜とした声で、呼びかける。その迷いのない呼びかけ
に、

「同志コムン！」

ポチョムは堂とした声で、思わず応えてしまう。

魔法同志コムンっ娘コムン。

魔法のマスコット猛獣 戦漢ポチョムくん。

「いくわよ！」

「オウッ！」

二人はお互いに声をかけ合つと、群がる兵士に向かって駆け出し
た。

二、血の日曜日16

発砲する軍隊。逃げ惑う市民。その間を駆けるコムンとポチヨム。

撃ち出される銃弾を、コムンが弾き返す。驚く兵士達に、ポチヨムが飛びかかる。

軍は崩れ出した。その隙に市民達が逃げ出す。

「同志ポチヨム！ 市民を！」

コムンが叫ぶ。兵士からの銃弾を、次々と弾き返す。

「分かった！ 同志コムン！」

ポチヨムが応える。兵士を次々と、魔力と体躯で投げ飛ばす。

コムンが鎌と鎚をふるう度に、兵士達が倒れていく。皆気を失っていた。魔力だけで、相手を失神させている。

兵士の倒れ方も、まるで何かに抱きかかえられているかのような。コムンが怪我をさせないように、魔法の障壁を地面との間に展開している。兵士は傷一つ追わず、倒されていく。

ポチヨムは時間が経つごとに、体が軽くなるようだった。コムンの放つ魔力が、ポチヨムの体に気力と体力を補充する。

「これ程とは……」

ポチヨムはコムンを見る。

ノエルの上に何かが起こった。それは分かる。目を見張るのは、外見の変身以上の変化。そう、その魔力。その力。そして何より、その身から溢れ出ている神々しいまでの気迫。

コムンは舞うように、鎌と鎚をふるう。踊るように兵士の間を駆ける。

兵士はなす術がない。何もできないうちに、皆倒されていく。

「まだ兵を退かせないつもり……」

コムンは小さく呟いた。兵士達はきりがない。突如現れた謎の少女と虎。その圧倒的な力。市民に向けていた兵士の多くを、士官

は二人に差し向けていた。

今や市民はほぼ、この場から逃げ出している。コミュン達は目的を達した。自分達も撤退を考えなくてはならない。だが

「同志コミュン！ そろそろ我らも退くぞ！」

「そうね…… でも！」

コミュンは顔を上げると、冬の宮を睨みつける。そこにいるのは魔法皇帝。この国の頂点。

「何を？」

「同志ポチヨムは先に退いて……」

この惨事を、この流血をどう思っているのか。魔法皇帝はどんな顔をしているのか。その顔を確かめたい。コミュンは鎌と鎚を握り締め、そう思う。

「同志コミュン！ 待て！ 魔法皇帝は」

魔法皇帝の力は絶大。この冬の帝国で、全ての魔力の頂点に立っている絶対者だ。コミュンといえども一人で飛び込もうなど無謀だ。それはかつて仕えたポチヨムが一番よく知っている。

「いくわ！」

「同志コミュン！」

「大丈夫！ 顔を拝むだけよ！ 後は任せたわ！」

ポチヨムの制止を振り切って、コミュンは大地を蹴った。

「前線との連絡は？ まだつかんのか！」

魔法皇帝 ニコライ二世は、苛立を隠せなかった。

ここは冬の宮の奥深く。司令所は士官の配慮により、冬の宮の奥の迎賓室に設けられている。それでも銃声は聞こえてくる。遠い分、実感が湧きにくい。小さく、乾いた音だ。だが確かに銃声だ。誰かが撃たれている音だ。

そんなことは望んでいない。今すぐ止めなくてはならない。だが

「銃を納めよ！　こんな簡単な命令が、何故伝わらん！」

彼の言葉は、前線に伝わらない。

サーベルを腰に差した軍服で、魔法皇帝は焦燥感とともに歩き回る。

臨時に設けさせた司令所に、魔法皇帝のブーツが苛立たし気な足音を響き渡らせた。

「市民を巻き込んで、何が革命だ……　何が理想だ！　革命論者め！　過激派め！」

魔法皇帝は吐き捨てる。自身の思念も、何者かによって遮られている。おそらく革命論者の仕業だろう。直接の伝令は、前線の混乱で上手くいかない。

いたずらに時間だけが過ぎる。この間にも、市民が死んでいく。

「もう一度いけ！　この馬鹿げた騒動を、終わらせろ！」

魔法皇帝が士官を叱りつける。怒鳴られた士官は、慌てて敬礼すると司令所を飛び出した。

「……」

飛び出し、廊下を走り去る士官。その背中を廊下の反対側で、何者かが息を殺して見送った。

「何者だ？」

誰よりも早く、その侵入者に気がついたのは、魔法皇帝自身だった。廊下の陰に向かって、力強く詰問する。司令所の中の士官と衛兵達が、一斉に廊下に振り向いた。

現れたのは赤い軍服を模したツープースのドレスの少女だ。

「魔法同志コミュっ娘コミュン」

陰から現れたコミュンは、真っ直ぐ魔法皇帝を見つめる。冬の帝国の皇帝。この混乱の最大の責任者。魔力と国力の象徴。魔法皇帝

マジカル・ツァーリ　絶対的な権威だ。

「ツァーリ！　お下がり下さい！」

「革命論者か？」

魔法皇帝の周りを、士官と衛兵が即座に固める。

「違うわ」

コミュンは答える。自分は革命論者ではない。

「ただの市民よ」

そう、市民だ。コミュンは思い出す。デモに参加した沢山の市民達。あの人達の思い。祈り。願い。そして痛み。怒り。嘆き

それを背負った市民の代表だ。

「市民？　ただの賊か？　そんな訳はなからう！」

士官の一人がそう決めつけると、誰よりも前に出る。

凜とした目の前の少女。混乱に乗じた、ただの賊な訳がない。

格闘するには広いとは言えないこの部屋で、油断なく士官はサーベルを身構える。その切っ先が真っ直ぐコミュンを狙う。

「そうよ。ただの市民じゃないわ。私は魔法同志コミュっ娘コミュンよ！」

魔法同志コミュっ娘コミュンは、魔法の鎌と鎚を悠然と構える。

士官に向けて構えつつも、目は真っ直ぐ魔法皇帝を見つめていた。そのことに士官が気づく。

「貴様の相手はこちらだ！」

士官のサーベルは、正確にコミュンの心臓を狙う。寸分の狂いもない。だが

「遅い……」

そう。狙いの正確性の割には少し遅い。コミュンは少しだけ鎌を動かす。士官のサーベルは、それだけでそらされた。

「この……」

「終わり……」

士官が次の一撃を繰り出そうとする。その為の一瞬の呼吸。その呼吸が終わる前に、コミュンの鎚が士官の肩に食い込んだ。

「ぐ……」

その重い一撃に、士官は気を失う。がくりとその身から力が抜けた。

その隙にできるであろう、一瞬の好機に反応したのは若い衛兵だ。

「……」

倒れ始めた士官の陰から、無言のままサーベルを突き出す。下から上へ。鋭角に。当たる寸前まで士官の体に隠れる軌道を選び、相手には見えない弧を描いて衛兵の刃がコミュニケーションに迫る。

「く……」

コミュニケーションは反応が遅れた。皇帝直属の衛兵ともなると、やはり腕に覚えがあるのだろう。鎌で防ごうにも、もう間に合わない。鎌を握ったコミュニケーションの左脇腹の下に、鈍く光る刃が迫る。

「ハッ！」

コミュニケーションは左足を、半歩後ろに退く。軍服をかすめるサーベル。流石のコミュニケーションも冷や汗が出た。軍服とサーベルの間には、僅かな隙間だけしかない。

その幸運を聖母に感謝する間もなく、コミュニケーションは鎚の柄を逆さに持ち直した。

「この！」

最初の突きが避けられたと見るや、そう吐き捨てて衛兵は刃を水平に向ける。

「ヤッ！」

気合いとともに衛兵は、刃を引いた。サーベルの戻し際に、脇腹を僅かでも切り裂こうとする。だがその狙いは阻まれた。刃は鎚の柄に防がれる。逆さに持ち替えたコミュニケーションの鎚の柄が、衛兵の攻撃をしのぐ。僅かに間に合った、木製の柄の先。それが鉄の刃を防ぐ。

「魔法の鎚か？」

衛兵が驚愕する。サーベルを防ぐ木製の柄。魔法のアイテムとしか考えられない。

「……そうよ！　そして魔法の鎌よ！」

コミュニケーションの鎌が唸りを上げて、衛兵のサーベルに襲いかかる。

「……」

魔法皇帝はその様子を、静かに見ていた。

二、血の日曜日17

皮肉だな

魔法皇帝は心の中でそう呟く。

前線への攻撃中止命令が伝わらない。そして今また年端もいかな
い少女と、衛兵が目の前で戦っている。誰がこれを望んでいるとい
うのだろう。誰も望んではない。

それでも戦いが起こっている。魔法皇帝は現実を見せつけられた
気分だった。

「控えよ！」

魔法皇帝はそう命じて、前に出る。奮戦していた若い衛兵が、丁
度サーベルを鎌で叩き落とされていた。士官と衛兵が、一斉に直立
する。魔法皇帝の前が一瞬にして空いた。

コミュニケーションと戦っていた衛兵すら、相手の間合いに入ったまま無防
備に直立する。

「……」

もちろんコミュニケーションは無防備な相手など狙わない。あらためて得物
を構え、魔法皇帝に向ける。

「コミュニケーションとやら……」

魔法皇帝は前に出る。冬の帝国の絶対権威が、臣下を脇に控えさ
せ、自らの足で市民の前に立つ。鋭い視線が、コミュニケーションの瞳を射抜
いた。

「魔法皇帝……」

コミュニケーションは息を呑む。魔法皇帝。その気迫。そのすこみ。その威
厳。無意識に一步下がりがりそうになり、コミュニケーションはそのことに驚く。

「速度の鎌に、威力の鎚か…… いい得物だ」

「何を……」

褒められるとは、夢にも思わなかったのだろう。コミュニケーションは思わ
ず呟く。

「だが左手に鎌では、威力が足りまい……」

「な……」

「そして片手に鎚では、狙いが甘くなる……」

「……この……」

魔法皇帝はコミュニケーションの攻撃を見抜く。その慧眼に、コミュニケーションはやはり気圧される。

「……くっ……」

だが下がる訳にはいかない。だからコミュニケーションはあえて前に出る。それぐらいしないと、気迫に負ける。押し戻される。気圧されしめいと、コミュニケーションは前に出る。

「マジカル・ツアーリ！ 覚悟！」

そしてコミュニケーションは気迫に負けた。押し退けなくては、押しつぶされる。その焦りが、短絡な行動を起こさせた。魔法皇帝は抜刀すらしていない。

その魔法皇帝に、コミュニケーションは鎌を振り下ろした。

「いい腕だ……」

魔法皇帝は軽く左手を掲げる。それだけで、コミュニケーションの鎌は防がれる。間を空けず繰り出した鎚の一撃も、見えない障壁に難なく弾かれた。

魔法皇帝が襲われている。それでも脇に控えた、兵士達は動かない。皇帝の命令を守る為、脇に控え続ける。

何故だと、魔法皇帝は自問する。

皇帝の命令を遵守する、鍛えられた兵士達。ただの市民を名乗り、絶対者にすら立ち向かう少女。これだけすばらしい国民がいて、冬の帝国は何故混乱の中にいるのか？

魔法皇帝はそう思わざるを得なかった。

「この……」

コミュニケーションは内心の焦りを自覚する。

魔法皇帝は無傷。兵士は動こうともしない。魔法皇帝が本気を出せば、いや兵士が動き出しさえすれば、コミュンはあつという間に窮地に立たされるだろう。

そのことを分かっているながら、魔法皇帝はコミュンの攻撃を甘んじて受けている。受けて立たれている。そう、コミュンの力は、まるで魔法皇帝に通じていない。

「く…… この……」

コミュンの鎌は届かない。コミュンの鎚は当たらない。繰り出す威力を増し、角度を変えても、その前で弾き返される。魔法皇帝に一撃を入れる前に、その障壁を破らなくてはならない。

「……」

コミュンは目を凝らす。淡い光が魔法皇帝の前に展開されている。同心円を描く光の輪だ。

コミュンは目測を、障壁に切り替えた。とつさに鎌を腰のベルトに差し、鎚を両手で構える。

「ダアッ！」

コミュンが裂帛の気合いとともに、鎚を振り下ろす。狙うは障壁の同心円。その中心。

その狙い通りに鎚が振り下ろされる。そこしかないという、障壁の中心。ただ一点にだ。

「何！」

魔法皇帝は思わず声を上げる。障壁の実体を見破り、ましてやその中心を寸分の狂いもなく打ち抜く。その技量。鎚の先端に集められた魔力も、見事としか言いようがない。

障壁が音を立てて碎け散った。

「これで！」

碎けた障壁が床に落ちきる前に、コミュンは前に出る。ベルトから鎌を抜き放ち、その勢いのまま魔法皇帝の右脇を狙う。

「ぬっ！」

魔法皇帝はついに抜刀した。だが間に合わない。左の腰から抜き

放ったサーベルは、構え直すには遅過ぎた。しかし

「ッ！」

コミュンは目を見張る。完全にとらえたと思っていた、魔法皇帝の右脇。サーベルは間に合わない。そのはずだった。

だが魔法皇帝のサーベルは、抜かれたままの勢いで、コミュンの鎌を柄尻で迎え撃っていた。コミュンの鎌の先が、魔法皇帝のサーベルの柄に僅かにめり込む。防がれる。

「この！」

コミュンは更に一步前に出る。前に出る勢いのまま、右手の鎚をふるつ。

「食らえ！ 『鎌と鎚の挟撃！』」

左手の鎌はそのままに、右手の鎚で魔法皇帝の左脇を狙う。魔法皇帝とは、鎌とサーベルでお互いが釘づけにされている。大振りになりがちな鎚の攻撃でも、これなら確実に相手をとらえることができるだろう。

「陛下！」

流石の家臣も思わず、身構えようとする。

「ハッ！」

魔法皇帝は気合いとともに、サーベルに力を入れた。鎌に柄を抑えられたサーベルは、僅かにしか動かない。それでも刃の角度が変わると、その切っ先は鎚の攻撃を正面から迎え撃った。

ガンッ！

と、互いの手に響く鈍い衝撃。鎚の面の打撃を、サーベルの点の切っ先が押さえていた。

「うるたえるではない！」

力に負け、たわみ、歪む魔法皇帝のサーベル。それでもコミュンの鎚を、すんでのところで押し止める。魔法皇帝は臣下に一喝し、コミュンの挟撃をサーベル一本で耐え抜いた。

「ッ！」

「伊達に魔法皇帝は名乗っておらんわ！」

驚愕するコミュニケーションに、魔法皇帝が左手を向ける。かざされた左の掌から、不可視な力が放出された。

「なっ？」

コミュニケーションの体を急激な浮遊感が襲う。一瞬何が起こったのかコミュニケーションには分からない。歪んだサーベルが床に落ちた。

「ガッ！」

コミュニケーションは天井に打ちつけられた。悲鳴が漏れる。その余りの勢いに、身構えることすらできなかった。一瞬の後、重力に負けて、コミュニケーションの体が落ち始める。

だが魔法皇帝の魔力は、まだコミュニケーションをとらえたままだった。

「ッ！」

今度も何が起こったのか分からない。コミュニケーションは魔力で水平に一度振り回され、壁に向かって投げ飛ばされた。己の身に何が起こったのか分かったのは、眼前に壁が迫ったその時だった。

「このっ！」

激突　その寸前。とつさに身を屈め、コミュニケーションは身を丸くする。コミュニケーションはそのまま放たれた独楽のように、空中で勢いよく回転した。

魔力のありつたけを、鎌に集中する。鎌から放たれた魔力は、回転の度に放たれ、壁に次々と切り傷をつけた。

「ハッ！」

気合いとともに身を拡げるコミュニケーション。鎚の柄を両手で持ち直し最後の回転で壁にふるった。

「何と……」

魔法皇帝は思わず唸る。

解き放たれた魔力の激突とともに、碎け散る壁面。そのコミュニケーションのとつさの機転と魔力に、この国の魔力の頂点に立つ者が思わず感謝の声を漏らした。

ここは冬の宮。その最奥の司令所。壁は外壁。その向こうは、もう外だ。

「……この……」

コミュンは瓦礫とともに、穴から空中に投げ出される。

陽がやっと傾き始めていた。緯度の高い、冬の帝国の首都サンクトペテルブルク。その長い冬の日が、やっと暮れ始めていた。

コミュンは灯りの漏れた、自らが壊した壁面を空中で睨みつける。魔法皇帝の姿は見えない。一撃も届かず、コミュンは魔法皇帝から逃げ出した。

「完敗だわ……」

冬の宮の裏　ネヴァ川の冷たい水面に落ちながら、コミュンは一人歯ぎしりをした。

三、アナスタシア・ニコラエヴナ・ロマノヴァ 1

マリーはノエルを抱き締めた。

「……」

生きて家に帰ってきた娘。ただただ黙って抱き締めてやることしかできない。

吹雪く外の天気よりも、もっとひどいものを見てきたであろう娘。せめて我が家の温もりをと、マリーはノエルを強く抱き締める。

「ごめんなさい……」

ノエルはマリーに身を任せ、その胸に顔を埋める。心配をかけさせた母。怪我也服も魔法でなおしたが、やはり顔に出たのだろう。「……」

ポチヨムは音を立てないようにと、静かに家の床にお腹を落とす。邪魔にならないようにと、親子の喜び合う姿を黙って見つめた。

私にも、よく分からないの

コミユンのことを問いただすポチヨムに、ノエルはそう言った。

二人はサンクトペテルブルクの外で落ち合った。ノエルは元の姿に戻っていた。

まだ煙を上げる首都を遠くに見ながら、二人は話し出す。

暴動は下火になり、兵は秩序を取り戻し始めていた。二人にできることは、もうこれ以上ないだろう。目立つポチヨムのことを考えると、早めに脱出した方がいい。

二人はそう判断すると、家に向かって歩き出した。

超タウリン…… 魔法の鎌と鎚…… 聖母への祈り…… ノエルの才能…… 謎の呪文

抱き合う親子を見つめながら、ポチヨムはあらためて考える。

何がノエルに力を与えたのか？ ノエルの魔法同志への変身の原因は？ 力の源は？

帰り道でそのことばかり考えるポチヨム。

そのポチヨムにノエルは言う。

問題は変身の原因じゃないわ……　その使命よ
前を見据えて言うノエル。その横顔。その視線。随分とポチヨム
には大人びて見えた。

使命

その言葉とともに、ポチヨムは親子を見る。微笑み合う親子。互
いを気遣い合う、優しい親子だ。娘が暴動で瀕死の重傷を負うなど、
あつてはならない親子だ。

使命とはなんだ

ポチヨムはもどかしい。あれだけ危険な目に遭つて、まだノエル
は使命などと口にする。

十五の少女が背負わなくては、ならないものなのか

ポチヨムは自問する。ノエルはまた、戦いに身を投じるかもしれ
ない。使命などと口に出している以上、そのことは考えなくてはなら
ない。戦いに出るつもりなら、思いとどまらせなくてはならない。
戦いの悲惨さは、ポチヨム自身がよく知っているつもりだった。

「ポチヨムさん。ありがとうね……」

不意にマリーがポチヨムに振り返った。

マリーの目の端に光るものに今更ながら驚かされ、

「あ、いや……　その……」

ポチヨムは色々と言い淀んでしまった。

冬の帝国は揺れていた。かつてなく揺さぶられていた。

今までは、どんなに揺れても一応の静寂は取り戻していた。

国を揺さぶろうとする革命論者。押さえつける帝国。

不満を口にする市民も、革命論者の押さえつけに国が成功すると、
一度は落ち着きを取り戻す。どんなに国が揺れようと、やはり魔法
皇帝の権威は絶対だった。

皇帝あつての国。帝国だ。自分達によって立つところは、やはり

帝国臣民であることだ。

しかし帝国は教会に発砲した。そしてガポン司祭は、その命すら落とした。皇帝はもう、聖教会の守護者たり得ない。そのことが人々の心を、魔法皇帝から引き離し始めた。

そして首都に瞬く間に広がった、ある少女の噂

人々はその少女のことを、口々に噂する。少女のことを、皆が声をひそめて話し合う。

帝国は聖教会の守護者たる使命を放棄した。そしてその時現れたのは、一人の少女だった。

暴動の中、多くの者をその魔法で癒した少女。暴拳の中、多くの兵をその魔力で退けた少女。

市民は皆、あの混乱の中では顔もよく覚えていない。

だが癒しと戦いの少女は、誰もが皆、同一人物だと信じていた。

圧政に苦しむ市民の為に、聖母様が少女を遣わした。人々は希望を込めてそう噂する。そしてその噂を信じようとする。

そう　流される噂のままに。

その噂は、帝国にとって致命的だった。帝国はなす術もなく、揺れ続けた。

帝国は揺れ動くままに、次の事件を迎えようとしていた。

三、アナスタシア・ニコラエヴナ・ロマノヴァ 2

月が代わり二月も半ばを過ぎた頃、ある日曜日にノエルはやつと首都に足を向けることができた。すぐにでもきたかったが、母はなかなか許してくれなかった。

実際多くの市民が怯えて暮らしていた。

ノエルのクラスの何人かも、学校に通ってきていない。あの気丈なアニーですら、今では『血の日曜日事件』と呼ばれるあの惨劇以降、学校で見かけなくなった。

世話になったガボン司祭の為に、お祈りを捧げたい。そう言っ
てノエルは、母を説得した。

ガボン司祭の教会は閉鎖され、兵士が周りを固めていた。市民は遠巻きにしかできない。幾人かの市民が遠巻きにでも祈りを捧げている。ノエルも皆に習って遠くから祈ることにした。

「……聖母様」

ノエルはガボン司祭の為に、聖母に祈りを捧げる。

祈りを終えたノエルは冬の宮へと向かった。

もう一度見ておきたい。そう思ったからだ。

母にはすぐに帰ってくるようにと言われている。だが自分の目で確かめたい。その思いがノエルをして、マリーの言いつけを破らせた。

あの日曜日に、何も知らずに人々について歩いた、ネフスキー大通りを一人で歩く。ノエルは通りの左右に、不安げに顔を曇らす市民の姿を見た。

冬の宮に近づくにつれて、建物の損傷が目につくようになる。バリケードや護身用の角材にする為に、市民が壊した暴動の爪痕だ。

ノエルはネフスキー大通りを奥へと歩く。

建物の損傷は次第に激しさを増していった。破壊された上に、多くが火で焼かれている。

いくつかの街角に添えられた花々。そこに書きつけられた祈りの言葉。一心に祈る遺族と思しき市民。

その光景を心に刻みつけながら、ノエルは更に奥へと向かう。

冬の宮前は一応の静寂を取り戻していた。

だが宮殿の前は増員された衛兵で、近寄りがたい雰囲気醸し出している。

ノエルは遠くから冬の宮を見つめる。自分が知らなかったことを知った血の日曜日事件。今この国に何が起きているのかを、突きつけられたあの日の惨状。自分にはまだまだ力がない。そう思い知らされた魔法皇帝の実力。

冬の宮を後にするノエル。歩きながら魔法の鎌と鎚をイメージした。空手で得物をふるう。

誰よりも鋭く、鎌をふるえるようになりたい。誰よりも強く、鎚をふるえるようになりたい。

ノエルは強くそう思う。そして暇な時間があると、このところ鍛錬にあてていた。

「助けて下さい！」

ネフスキー大通りの半ばまでくると、ノエルは不意に後ろから誰かに呼び止められた。助けを呼ぶ声だ。少女の切羽詰まった声だ。

「あの人達が……」

助けを求めてきたは、赤毛の少女だった。

輝く澄んだ瞳を潤ませて、少女がノエルに走り寄ってくる。

左右で束ねられた艶やかな赤毛が、一度両脇にフワツと広がってから肩に向けて落ちていた。その優雅でしなやかな曲線を描く赤毛が、肩が上下する度に大きく揺れる。

「どうしたの？」

「それが……」

「おっと！ もう一人増えたな！」

ノエルの問いかけに少女が答える前に、その少女の後ろから下品な声色で男が声をかけてきた。男は三人組だ。三人とも薄汚れた作業着を着ている。

少女を追いかけてきたらしい。手にそれぞれ得物らしきものを持っていた。

「あの人達が…… 私が道で花を売っていたら、革命の資金を寄越せつて。私そんなお金……」

「何？ ゆすり？ たかり？ 強盗ね」

ノエルが少女を自分の背中にかくまった。二人の少女の前に、三人組はいやらしい笑みを浮かべて立ちはだかる。通りをいく市民が、遠巻きに様子を窺った。

「失礼だな、お嬢さん。俺達は革命の義士でしてね。きたるべき空想科学的社会 何だ？ 何だった？ イーゴリ？」

「さあ？ 何だっけえ？ オレ頭わりいから分からねえや。ねえ、ワシリーの兄貴イ」

イーゴリと呼ばれた小太りの男は、こん棒のような木切れの得物で頭を搔く。へらへらと笑いながら、イーゴリは隣の痩せた小男に聞き直した。

「俺っちだつて知るかよ。イワン兄が知らないもの、俺っちが知る訳ねえ。いつもふんふん頷いてりやいって、俺っちは言われているもの」

ワシリーと呼ばれた痩せた男は、手に持ったナイフを神経質に右に左にとやりながら答える。

「役に立たねえな、お前らは……」

イワンと呼ばれたリーダー格の男が、鉄パイプを左の掌に打ちつけながらぼやく。

「何よ？ 結局分らないんじゃない。ただの強盗ね。こんな弱い女の子相手にお金せびつて、恥ずかしくないの？ あんた達？」

「いやいや、お嬢さん。今この国で起こっているのはまさに市民革命。市民一人一人の力が、そう市民一人一人のお金が必要でしてね」

「はあ？」

一際震え出した少女を後ろに隠してやりながら、ノエルがあからさまに不審の声を上げる。ノエルは軽く念じ、虚空より魔法の鎌と鎚を呼び出した。必要になりそうだ。

「だからこうして、善意の募金を募っているんだよ。その何とか革命の為に」

「ふん。ろくに革命の名前も言えないくせに……」

「言えるさ。空想科学的社会 何だっけな？ てか、空想科学って何だよな？ まあ、空想でも科学でも、何だっていいんだけどよ。こちららは」

「はあ？ バツカじゃないの？」

「何を！ イワン兄を馬鹿にすんな！ 俺っちと違ってイワン兄は中学校を出てんだぞ！」

「そうだ。オレいつも分け前は、イワンの兄貴にい、計算してもらってるぞお」

「お前ら黙ってる。さあ、どうせ花をいくら売っても、税金を払う気もなかっただろ？ それなら革命の為に、その分をこの義士様が使ってやるおってんだ」

鉄パイプをわざとらしく背中に隠し、イワンが少女に手を差し出す。

「はあん？」

革命の義士を自称するイワンに向けて、ノエルが鼻を鳴らした。

鉄パイプ片手に、年端もいかない少女にお金を要求する義士。そんな義士がいる訳がない。

冬の帝国はデモや暴動で、治安が乱れ出している。革命騒ぎによる世情の混乱だ。

弱体化する政府の支配に、便乗して騒ぐ不埒者だろう。

「お嬢さん。痛い目に遭う前に、おとなしく言うことを聞きな」

「ヒィ……」

「何を……」

少女の悲鳴を背に、ノエルが魔法の鎌と鎚を構える。
そしてノエルが油断なく相手を見据えると

「お止めなさい！」

凜と響く別の少女の声が、街道に響き渡った。

三、アナスタシア・ニコラエヴナ・ロマノヴァ

その凜とした少女の声に、騒ぎを取り囲んでいた市民が一斉に振り向いた。少女は一瞬にして、周囲の視線を釘づけにする。

同性のノエルですら、そう今まさに暴漢に立ち向かおうとしていたノエルですら、その少女の放つ気品と雰囲気を目を奪われる。

「あつ……」

そしてノエルは苦々しげに呟いた。知っている顔だったからだ。更に言えば知っているその顔の持ち主に、一瞬目を奪われてしまったからだ。

少女は質素だが気品溢れるドレスを着ていた。大きく可憐な瞳を陽光に輝かせ、自信に満ちあふれた笑みを浮かべている。よく梳かれていると思しき金髪を腰にふわりと流し、意思の強そうな唇の赤を見せつけていた。これ程の少女はそうはいない。

「ブルジョワ…… またあんななの？ てか、何でここに……」

そう、その少女はアニーだった。アニーは一歩前に出た。

「大の大人が、年端もいかない少女に恐喝とは。恥を知らない！」

「何だ、てめえは？」

「私？ 私はアニー。ただの通りすがりよ」

アニーはそう言うと、力強く歩き出す。騒ぎの中心までくると、ノエルと花売りの少女を背にして暴漢と対峙した。怯みも怯えも何もない、やはり凜とした立ち姿だ。

「もう一度言うわ。お止めなさい。でなければ私が相手よ」

「何を！」

「イワンの兄貴い！ 生意気だあ！ やってやれ！」

「いや、俺っちにやらせてくれ！ いたぶってやる！」

「ちよつと！ いきなり現れて何カツコつけてんのよ？」

三人組がいきり立たった。ノエルも一緒になって声を荒らげる。まるで仲間の一人のようだ。

「危ないわ。あれ？　あなた、ノエルじゃない？　何してるのよ？　こんなところで」

「なっ？　今気がついたのね！　腹立つわね、あんたは！　いつもいつもいつも！」

「まあいいわ、危ないから」

「危ないのはあんたよ。下がってたら。ブルジョワさんには荷が重いわよ！」

アニーに皆まで言わせまいと、ノエルはその前にずいっと出た。

「私はブルジョワさんじゃないわ、アニーよ。何度も言わせないでいいからここは私に」

アニーは更に、そのノエルの前に出ようとする。

「何言ってるのよ！　ここは私が助けを頼まれたの！　ブルジョワさんはお呼びじゃないの！」

「あなたね！　そんなへんてこな武器で、何をしようって言うのよ！」

「何を！　これは鎌と鎚！　農具と工具！　貧農の命の道具に、へんてことは何よ！」

「少なくとも武器じゃないじゃない！　下がってなさい！」

少女二人がいがみ合う。どちらが戦うか、声を大にして言い争った。

「はは、楽しそうだな？　お嬢ちゃん達！」

「何処がだ！」

あきれた様子のイワンに、ノエルが勢いよく振り返える。

「おっと。怖いね」

イワンはおどけたように掌を向けながら、降参の仕草をしてみせた。その笑みの自信は手に持った鉄パイプだろう。その硬さを誇示するかのように、掌に何度も打ちつけ始める。

「待ってなさい！　今、決着をつけるから！」

鉄パイプに怯みもせず、ノエルが相手を睨みつける。

「そうよ！　黙ってなさい！　いまこの娘と話をつけるから！」

「俺っちは、金髪の娘がいい!」

「オレは兄貴にい、任せろう」

「二人いっぺんに相手してやるよ。かかってきな!」

イワンが鉄パイプを、威嚇の為か大きく一振りした。わざとらしい舌舐めずりの真似までして、得物を構え直す。後の二人もそれぞれに身構えた。

「どうする? ブルジョワさん? 足引っ張るのなら、遠慮して欲しいんだけど」

「アニーよ。舐めないでね。こう見えても私、結構強いよ。知ってるでしょ?」

「ふん。フォローはしないわよ」

「ええ、別に結構よ」

ではと、ノエルは魔法の鎌と鎚に魔力を送る。二つの得物が一瞬光に包まれた。

「何? ノエル? 今の?」

「氷でコーティングしたのよ。怪我させても、後味悪いしね」
「なるほど……」

アニーが左手を内から外に払った。その手には虚空より現れた、一振りのサーベルが握られていた。アニーが右手にサーベルを持ち替え軽く念じる。

サーベルがこちらに一瞬光り、その刃が氷に包まれた。

「ちよっと、真似しないでよ」

ノエルが赤毛の少女を後ろに押しやる。赤毛の少女は怯えた様子で、後ろに下がった。

その時赤毛の少女が小さくほくそ笑んだことに

「いいじゃない」

「よくないわよ」

ノエルもアニーも気づかない。

「ごちゃごちゃと!」

イワンはそう叫ぶと、欲望に歪んだ顔で前に出た。

三、アナスタシア・ニコラエヴナ・ロマノヴァ 4

イワンが衆人環視の中、鉄パイプを振り上げた。ワシリーとイーゴリが後に続く。

「フンッ」

「ハイッ」

ノエルが軽々と、アニーが悠々とイワンの一撃を避ける。打ち合わせてもいないのに、奇麗に左右に別れた。すれ違い様に、ノエルがイワンの脇腹に鎚の柄の先を突き入れる。

「痛っ！ ぐ…… この……」

「あつ、兄貴イ！ この！」

イーゴリがこん棒を振り上げた。体格に似合わず機敏な動きで振り下ろす。ノエルが半身に体をずらして横に避けると、イーゴリは今度は内から外へ横に薙ぐようにふるった。

「早いじゃない！」

ノエルは左手の鎌の背で、その一撃を上にとらした。その瞬間にイーゴリのお腹が、がら空きになったのをノエルは見逃さない。

ノエルは右手の鎚をすかさず前に突き出した。下から上へと突き出されたその攻撃は、見事に小太りの脂肪の隙間を突いて鳩尾にめり込む。

「ぐえっ！」

イーゴリがつぶれた蛙のような悲鳴を上げた。そのまま大きな音を立てて崩れ落ちる。

「おおお、お嬢ちゃん！ 俺っちと遊んでくれ！」

ワシリーが当初の目的を忘れたかのような奇声を発し、アニーにナイフを突きつけた。闇雲に間合いも何もなく、ただひたすら振り回す様は、色に狂った本人の目によく似合っていた。

「ひひひ！ どうだ！ 怖いだろ？」

「その距離で振り回しても、意味ないと思うんだけど？」

アニーは軽くサーベルをふるった。キンツという金属がかち合う音がして、ワシリーのナイフがあっさりと宙を舞っていた。

「えっ？」

掌を襲った衝撃に、目を剥くワシリー。己の掌からナイフが弾け飛んでいることを悟ると、顔を真っ赤にしてアニーに向かってくる。

「てめえ！」

「近づかないで」

アニーがそのワシリーの鼻先に、サーベルを突きつけた。

「ヒッ！」

「危ないから」

アニーがそう告げると、ワシリーの鼻先にナイフが落ちてくる。

刃を下にしたそのナイフは、ワシリーの足下の街路に深々と突き刺さった。

「ヒイ……」

ワシリーがその場で気を失ってへたり込んだ。

アニーが鼻で笑ってサーベルを下ろす。

「この！」

そのアニーの上に、イワンの鉄パイプが振り下ろされた。

「アニー！」

ノエルが思わずその名を呼ぶと、アニーは軽やかに振り返る。鉄パイプはアニーの鼻先をかすめて、地面に叩きつけられた。その衝撃に手をしびれさせながら、イワンが毒づいた。

「このアマ！」

「やっと名前を呼んでくれたわね。ノエル」

「何、余裕こいてるのよ！」

「ふふん。だって余裕じゃない」

「てめえ！」

イワンが怒りに震えて、鉄パイプを振り上げる。

「……」

後ろで怯える赤毛の少女が、両手を祈るように組んだ。目も堅く

つまり、一心に何かにお祈りをしているように見える。そう、その腕に隠れた口元が、悪意に歪んでいる以外は

「えっ？」

アニーが驚きに声を上げる。気を失っていると思ったワシリーが、うつむいたままがつしりとアニーの足首を掴んでいた。まるで腕だけ、別の意思が動かしたかのようだ。

「ワシリーよくやった！　くらえ！」

「くっ……」

アニーが唸る。掴まれた足は振りほどけない。振り下ろされる鉄パイプを受け止めようと、アニーがそれでも細身のサーベルを振り上げた。

間に合わない

アニーが相手の一撃を覚悟したその瞬間、

「アニー！」

ノエルが割って入って鎚を両手で振り上げた。

ガンッ！

という衝撃音とともに、イワンの鉄パイプが折れ曲がって宙に舞っていた。だが大振りとなったノエルは、そのままクルッと回ってしまい、イワンに背中をさらしてしまう。

「てめえ！」

その隙をイワンは逃さなかった。鉄パイプを弾き飛ばされ、更にしびれる腕でノエルの背中に左手を向ける。

「　ッ！　魔法？」

首だけ振り返って目を剥くノエル。魔法で対抗しようにも、完全に背中を見せてしまっている。間に合わない。それでもノエルは障壁を張るべく、己の左手に魔力を集中する。

「くらいな！」

「この……」

「ノエル！」

だが誰よりも早く魔法を放ったのはアニーだった。アニーはとっ

さに左の掌を跳ね上げる。

「ぐわっ！」

巨大な氷の塊が、雨霰とイワンに横から襲いかかる。一際大きな氷塊を顔面に食らったイワンが、目を剥いて後ろに倒れていった。

「ふふん！ どう！ アニー様の魔力！ 思い知ったか！」

「痛いわよ！ 何やってんのよ、アニー！ 痛いって！」

「あっ！ え、何？ ノエル？ ご、ごめん！」

とっさに放たれたアニーの氷の魔法。とっさが故に狙いが甘かったそれは、

「痛いって！」

ノエルにも大量の氷塊をぶつけていた。

三、アナスタシア・ニコラエヴナ・ロマノヴァ 5

ノエルが呪文を静かに詠唱する。路上で気を失った男達の上に、多量の冷水が降り注いだ。

「ヒッ！」

暴漢達は悲鳴を上げて目を覚ます。

「まだ相手して欲しい？」

「ヒヤッ！」

ノエルが意地悪な笑みを向けると、イワン達は口々にわめきながら、その場を去っていった。遠巻きにしていた人々から、歓声がかかる。

「あはは！ どうも！ どうも！」

「これに懲りたら、もう二度と悪さしないのよ！」

ノエルが歓声に応え、アニーが暴漢の背中に向けて言った。

「あの…… ありがとうございます……」

赤毛の少女が深々と頭を下げた。体を細かく震わせている。

「いいの。いいの。たいしたことないから。もう怯える必要はないからね。ごめんね。ブルジョワさんがいなければ、もっと早く片づいたんだけど」

「何よ。ちゃんと二人も倒したじゃない。一人しか倒してないのに、偉そうね、ノエルは」

「私が鉄パイプを防いであげたからじゃない。油断するのが早いんだよ、アニーは」

「ぐぐぐ…… だってあいつ…… 絶対気を失っていたはずなのに……」

アニーは納得がいかないのか、齒を食いしばった後、一人でブツと呟く。

「あの…… 私…… お礼とかできなくて……」

「いいの、いいの。私はブルジョワさんに奢ってもらうから」

「なっ？ 何だよ？」

「命の恩人ですから私は！ アニーの！」

「ぐぐぐ……」

「本当にありがとうございます…… 私これで……」

少女はもう一度深々と頭を下げると、走り去る。そして何度もノエルとアニーに振り返り、その度に頭を下げながら街路の向こうへ消えていった。その様子を二人で笑顔で見送ると、

「ピロシキね！」

「くやしー！」

ノエルが嬉しそうに笑い、アニーが悔しそうにほぞを噛んだ。

近くの屋台で買ったピロシキを、ノエルとアニーはその側の空き地に入り込んで食べることにした。野積みされていたレンガの上に、二人は並んで腰をかける。

ノエルはホクホクに焼いたピロシキに、目を輝かせてかじりついた。

「ムツハーツ！ おいしい！ 奢りのピロシキってサイコーッ！」

「ふん。よござんしたね」

アニーはふてくされながら、自分の分のピロシキに口をつける。

「何よ、アニーったら。見るからにブルジョワなのに、この程度の出費で随分と不機嫌ね」

「お金よりも何よりも、あなたに奢らされているってのが気に食わないわ」

「あら、そう。ま、分かっただけだね」

ノエルが殊更笑顔を作って、アニーにその顔を向けてやる。

「腹立つー！」

「あはは！ 後、氷をぶつけられた感謝料に、ボルシチを」

「うるさい！」

「あはは！」

ノエルは笑ってピロシキを平らげると、レンガから飛び降りた。
「さてと……」

ノエルは不敵に微笑むや、魔法の鎌と鎚を虚空から呼び出した。
「何よ？」

「だってアニーは二人倒していて、私は一人しか倒してないじゃない。数は合わせないとね」

「ふうん…… 確かに…… 私もあなたの強さは気になっていたのよね……」

アニーもピロシキを食べ終える。思い出したのは、リッキーを助けた時のノエルの魔力だ。

アニーはそのままレンガから立ち上がり、こちらも虚空からサーベルを呼び出した。二人は同時に己の得物を氷でコーティングし、油断なく構えた。

「へへ……」

「ふふ……」

挑発的な笑みが思わず漏れる。強い。立ち姿だけで分かる。暴漢など比べ物にならない。

ノエルが先に仕かけた。左上から打ち込むように魔法の鎌を繰り出す。

アニーはサーベルで、追い打ちをかけるようにその攻撃を払い除ける。

ノエルは払われた上に、そのままつんのめさせられた。

たった一つの動作で、攻撃を防がれ体勢すら崩されたのだ。

「なっ？」

ノエルは足を踏ん張り、体勢を整え直そうとする。だがその僅かな隙を突いて、その顎の先にサーベルが突きつけられた。避けられない訳ではない。

だが

「く……」

だがその突きをノエルが身を屈めて避けると、さらに体勢が崩さ

れた。アニーが不適な笑みを浮かべる。ノエルの崩れた重心の先を迎え撃つように、サーベルが切り返された。

「く……この……」

ノエルはとつさに右腕を跳ね上げる。瞬時に逆さに持ち替えた鎚の柄が、僅かに間に合い、サーベルの一撃を眼前で受け止めた。

ノエルは押し込んでくる相手のサーベルの力を利用し、その刃をはね除けながら、跳ね上げるように上体を戻しやっと自分の体勢を整える。

「ッ！」

だが姿勢を正し、重心を取り戻したノエルを迎えたのは、間髪を入れない鋭く速いサーベルの一突きだ。

たった今はね除けたばかりなのに、アニーは無駄なく構え直して突いてきた。

「ハッ！」

ノエルは渾身の力で鎌をふるう。アニーのサーベルを、まさしく目と鼻先で払い除けた。

「く……」

「あら、どうしたの？ 余裕がないようだけど？」

「うるさい！」

ノエルは思わず声を荒らげる。町や村のチンピラを相手にしているのとは、何もかもが違う。攻撃を読まれることも、自身の力を利用されることも、これほど踊らされるように簡単にされるとは、今までノエルは考えたこともなかった。

「もらったわ！」

「痛っ！」

アニーの一振りが、ノエルの右肩を打ち据える。ノエルはあつという間に、一本とられた。

「まだまだ！」

「あはっ！」

その後も面白いようにアニーは攻撃を当てる。実力がそれほど違

うとは、ノエルには思えない。それでもほんの少し何かが足りないだけで、ノエルだけが青あざを作っていく結果になる。

ノエルはついに肩を落としてしまう。それでも相手を睨みつける。アニーは汗一つかいていないようにも見えた。

「慣れよ。慣れ。ノエルは独りで練習してるんじゃないの？　だから人の呼吸と癖に、慣れないのよ。私は剣術の先生に、個人で教えてもらっているもの」

「ぬぐぐ……ブルジョワね……」

「否定はしないわ。でもあなたはあなたで、そんなおかしな得物使うからよ」

「いいの、私は貧農の娘。私の得物は鎌と鋤。農具と工具が私の武器だもの」

「あつ、そう。でも同情はしないわ。では」

アニーがあらためて得物を構え直す。

その溢れ出る気迫は、敵に相対する騎士でもあるかのようなのだ。

ノエルは呼吸を整える時間を稼ごうとしてか、

「ちょ、ちよつと……きゅ、休憩よ……」

あからさまに提案した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3027n/>

空想科学的社會意義小説 魔法同志コミュっ娘コミュン

2011年10月8日03時26分発行